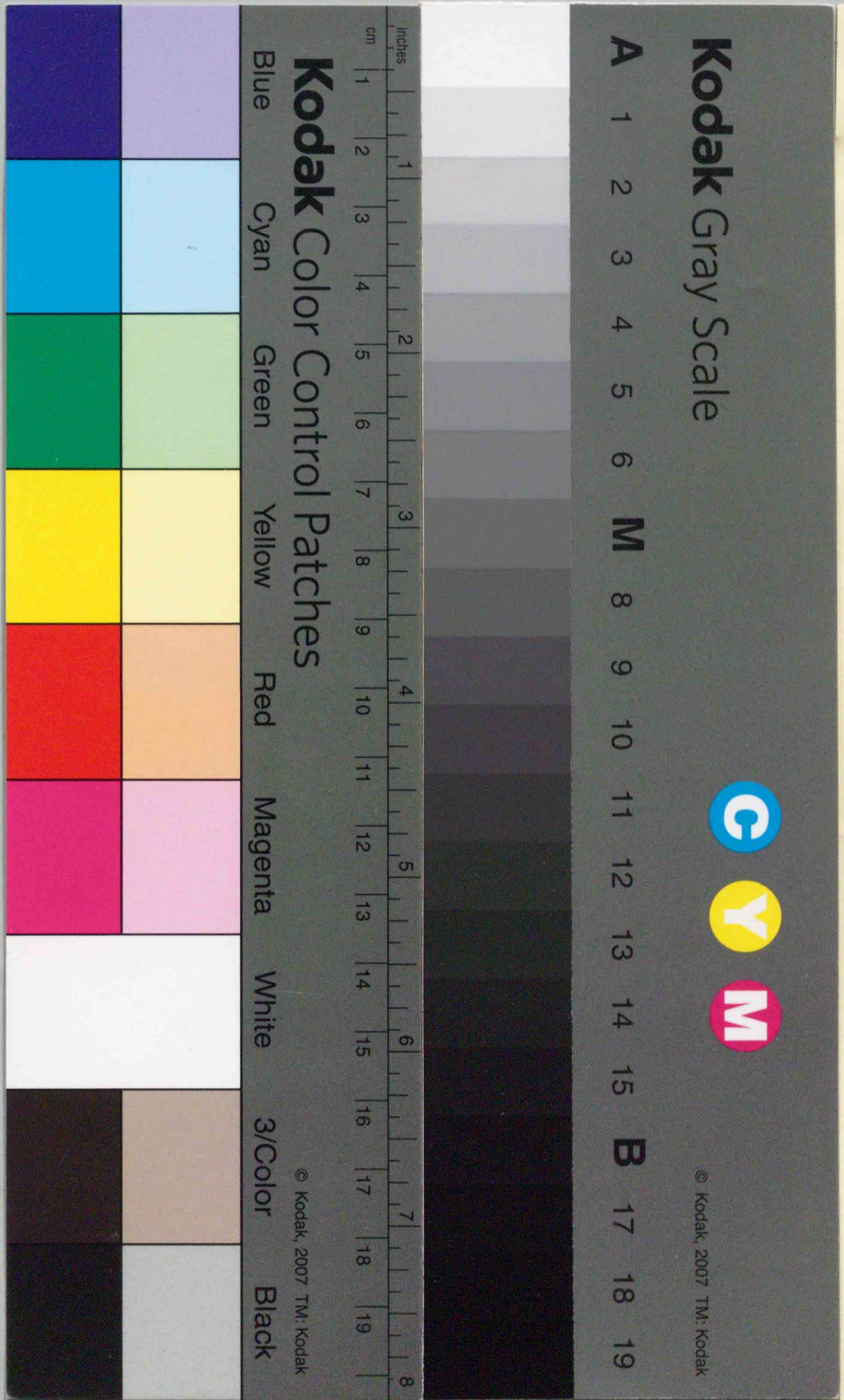
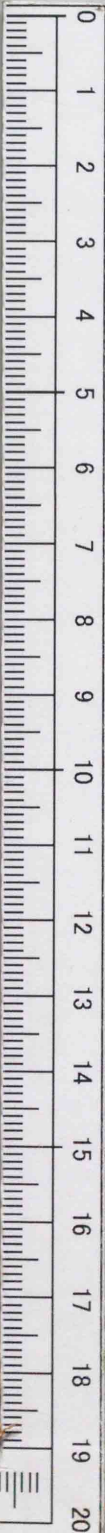


教科書文庫
4
810
41-1927
2000090692

編吉則波八
本讀語國代現
 (版正修)
 三卷

版藏館成關京東



41425
 教科書文庫

4
810
41-1927
20000 90692

濟定檢省部文
用科語國校學中 日五十月二年二和昭

教科書文庫
4
810
41-1927
2000090692

編吉則波八
本讀語國代現
(版正修)



版藏館成開京東

広島大学図書
2000090692


資料室

4a
810
AB2

現代國語讀本 卷三

目次

一天の愛子……………徳富健次郎……………一

二大地に立つ(詩)……………福田正夫……………五

三車窓の春(自修文)……………谷崎潤一郎……………七

四俳句評釋……………沼波瓊音……………一〇

五春雨(俳句)……………與謝蕪村……………七

六潮の岬……………杉村楚人冠……………六

七ラヂオ(自修文)……………久米正雄……………三

八奈良の初夏	大類	伸	六
九緑蔭閑話	相馬	御風	五
一〇六月の朝詩	宮崎	丈二	四
一一雨の趣味	黒田	鵬心	四
一二梅雨ばれ	幸田	露伴	四
一三即席三題			五
一いのち			五
二感激の生			六
三鮒			六
一四木曾の木山(自修文)			六
一五歸り行く労働者(詩)	百田	宗治	八

一六水郷の夏	中谷	徳太郎	八
一七感話三則	柳澤	淇園	九
一かんにんの四字			九
二人に長たる人			九
三善心坊と法心坊			九
一八いざさらば母國よ	(悲絶壯絶英雄の最後)		九
一九西郷の度量	勝	海舟	一〇
二〇南洲遺訓	西郷	隆盛	一三
二一關東大震火災記	(關東大震記)		二五
二二感 謝(自修文)	三宅	周太郎	三四
二三近代の和歌(和歌)			三三

二四 停車場で……………小泉 八雲…一三五

二五 轡十文字……………菊池 寛…一四三

二六 自 修……………嘉納治五郎…一四一

二七 人の香(候文)……………竹越與三郎…一三九

二八 手紙の懐かしさ……………前 田 晁…一三六

二九 鶯の巢立(詩)…………………………一三五

三〇 渡邊華山(自修文)……………村 松 梢 風…一三七

三一 實驗動物の生命……………正木不如丘…一三五

三二 朝顔と香魚……………上 司 小 劍…一三二

現代國語讀本 卷三

一、感想文を授けてその短句法により、
表はそれた力強い表現法を予し
一向々に強く人の肺腑に響かせる
止まらぬ

二、世界列強の中における日本の
現状を日本内外の在るべきべき
を心得て國民的自覚を
得せよ

德富健次郎
舊號は蘆花
熊本縣の人
明治元年生
文學者

天の愛子

德富健次郎

日本に生れたことを感謝する。日本は皇天の祕藏子だ。
世界の地理・歴史から、日本の地理・歴史に返つて見れば見
るほど、私は天の意匠の指痕を鮮に讀む。世界の爲に日本
を育てるため、天はどれほど面倒を見たことか。父の嚴母
の慈、あらゆる手によつて、日本は今日の今日まで育てられ
た。勿體ない大御親の心盡しに、私は感激せず居られぬ。

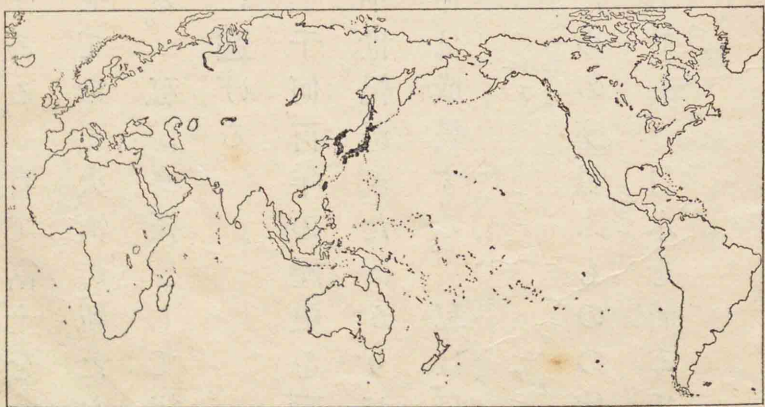
否でも應でも日本は天の愛子だ。
世界地圖に見る日本の小ささよ。小さいが當然。種子
は小さい、要は小さい。私は嘗て歌つた。――



徳富健次郎

日輪は見る目に小なれど、光
世界を照らす。如く
日本は地圖に小なれど、志、四
海を懐く。
世界の何處に日を旗章にする
國があるか。自ら日本と名のつた時に、自ら日を旗章と定
めた日に、日本の位置と天職は疾くに定まつてゐた。
世間見ずであつてはならぬ。それゆゑに、明治維新の初

から、大いに知識を世界に求めたの
だ。私は日本の貧しさを知つてゐ
る。古今東西あらゆる優秀な物が
日本に無くて他の兄弟にある。愛
によつて私はそれを我が物にした、
また、しようとしてゐる。愛する者
は凡べてを持つ。
私は日本の病を知つてゐる。日
本人の私はうんざりするほどその
病を持つてゐる。しかし、私は失望
せぬ。私を支配するものはみづみ



阿蘇 熊本縣に在る
活火山 九二メ
一五九二メ
浅間 群馬・長野野
群馬に跨る活火
山に海抜二五
五〇メ
ト

豫言に應ず
座に就く
使命を肩負ふ
白鷺

づしい生命だ。私の衷に火が燃えてゐる。嘗て富士を一
夜に聳えさせ、今も阿蘇・浅間を煙らせてゐる火、恆に新たな
創造の火、それが私の衷に燃えてゐる。私が身振ひして起
つ時、凡百の病は日の前の夜のやうに逃げる。

私は日本の若さを知つてゐる。二千何百年の歴史を脱
いで、明治維新に生れ返つて、やつと半世紀過ぎたばかりだ。

若いが當然だ。若いが生命だ。生命は成長する。私は日
本の前途を信ずる。

應ずるものへの豫言、就くもののため、の座、負ふもの、の使
命自覺だ。私はもはや逃げも隠れもせぬ。日本を將ゐて
潔く定められた天の愛子の座に就く。

福田正夫
神奈川縣の
人、明治二十
六年生、詩人

二 大地に立つ

福 田 正 夫

冬を凌いで来た樹々の如く
わが心もく大地に立つ

樹々よ緑よ花の野よ

光は空に流れ

風はがらかな四月

春ははそつから湧き出て

空に浮く白く雪となる

立てよを、と

我等は若く鮮やかな樹々を
 見の大きき目ざして
 伸びて行く大樹を
 苦しむ悩む大地の
 真く輝くたそ

己よ我等の青春は
 大地に根を張つて
 希望の糸に出發すのだ

自修文

谷崎潤一郎
 東京市の人、
 明治十九年
 生、文學者

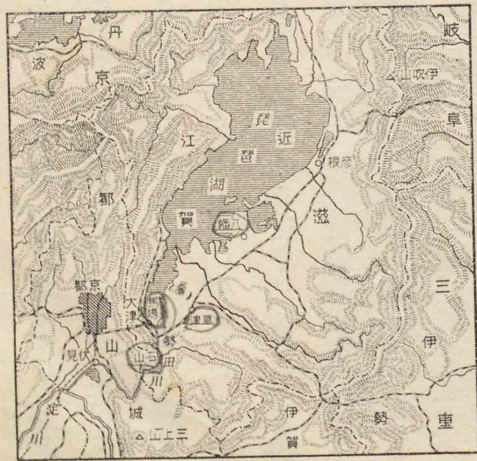
三 車窓の春

谷崎潤一郎

鬱陶しい雨がざあくと美濃の野山を閉籠めて、恐しく蒸暑い日の午後である。汗かきの私は、べつとりと脂の滲んだ顔を窓外に出して、ほてつた兩頬に冷かな雫を受けた。

汽車は關が原を出ると間もなく近江の國境に入る。兩側の平地には菜の花が一面に咲亂れて、見渡すかぎり遠くつゞいて居る。ちやうど米澤地方の桑畑のやうに、菜畑は近江國一圓を埋めて居るかと思はれる。若し天氣の好い日であつたなら、黄色い花が眼の覺めるやうに萌えて輝くであらう。

湖水の端の見え出したのは、米原を



一圓

湖水
 琵琶湖
 米原
 滋賀縣

幽暗
奥深くすすか
て暗いさま

山容
山のむち
朦朧
おぼろに暗い
さま

口碑
いひつたへ
される
くもる
人磨
人丸とも書
く柿本氏、武
人、持統・文
二朝に仕へた



谷崎潤一郎

過ぎてからである。折々雨があがりかゝると、白い雲の裏から薄
日が光つて、幽暗な拜殿の奥の神鏡のやうに、青葉の生ひ茂つた丘
陵の蔭から、湖の面がきら／＼と雲霧の中に窺はれる。頓て遙に

彦根の城の白壁が右手の小高い山の
一角に現れる。伊吹比良比叡など、色
色の神話や傳説を思ひ出させる國境
の山容も、今日は朦朧と打煙つて姿を
見せない。

近江國は私に取つては幼い時分か
ら憧れの的となつてゐた。伊吹山の
大蛇だの、勢多の唐橋の龍神
だの、三上山の蜈蚣だの、お伽噺や
歴史讀本に書いてある奇怪な口
碑が、どれほど少年時代の私の頭
に想像の火の手を煽つたことであ
らう。「霞立つ春日のさける百敷の
大宮所見れば悲しも」と人磨

短長
歌

藤原俊成
初撰集

詠歎
うたひほめる
忠度
平忠盛の子、
清盛の弟、壽
永三年(八四
四年)四十一

近江の海
夕波千重
心もしぬは
古思ほ

古典的
昔ふう
考證
古代の事物を
説くのに證據
の穿鑿を必要
とする事
束縛
しづり、制限

が詠歎した志賀の都
は、平家物語の「忠度都
落を讀むに及んで、一
入懐かしい思がした。
近江國といへば、私は
何時でも、土佐繪のや
うな春霞が湖水を繞
る山々浦々にたなび
いて、明るい、暖い、さうして何となくうら悲しい、夢のやうな土地を
心に描いたのであつた。



彦根城

奈良や京都の薄暗い古典的趣味を喜ぶものは、あの麗かな近江
國を何と思ふであらう。鏡のやうな湖水の沿岸には、枯淡な、歴史
的考證の束縛を受けない、自由な豊富な、さまざまの神祕が潜んで

三 車窓の春(自修文)

春のあけぼのの光り
しづかにあつた
あまねく春の光り

ロマンス
小説的物語

居るやうにも考へられる。八幡章津石山馬場——下車して見物
したいと思ふ三つ四つの停車場はあるが、一旦京都へ到着してか
らのことと極めて、私は車室の窓から、脇目もやらず移り行く風景
に眺め入つた。あゝ近江國ちやうど菜の花のやうな美しいロー
マンズの生れる國！私は此の風光を背景にした物語を書いて
見たい。

勢多の鐵橋を渡る時、ぱつと雲切れがして、琵琶湖遊覽の白塗の
蒸氣船が、青々とした水の面に漣を立てながら目の下を走つて行
つた。

四 俳句評釋

春

沼波 瓊音

高麗船の寄らで過行く霞かな。

蕪村

沼波瓊音
名は武夫、名
古屋市の人、
明治十年生、
俳人、第一高
等學校教授
蕪村、本姓
與謝氏

は谷口、攝津
國の人、江戸
時代後期の俳
人、天明三年
六月十七日歿



與謝蕪村

高麗船と申しますれば、神功皇后の三韓征伐の少し後ぐ
らゐに、高麗から貢物を持つて来る其の船が聯想されます。
高麗船は非常に華やかに飾つた船であつたでせう。それ
を、或人が、春の日、霞がたつて居る
時に、海岸に居つて今見て居ると
想像します。「向ふの霞の中から、
高麗船が非常に綺麗な帆を揚げ
て沖に現れる。もう此の港へあ
の船が着くだらうと云ふので、其の頃の悠長な人が海岸で
待つて居る。さうすると、其の待つて居る港へは着かない
で、ずつと其處を通つて、又向ふの霞の中へ這入つて見えな

雷の下に黙す
る大都かな
瓊音

其角
丈草

丈草
内藤氏、尾張
國犬山侯の重
臣、芭蕉の門
人、寶永元年
四月二十五日
歿



蹟筆音瓊

くなつてしまつた。」さういふ有様を詠んだのです。「高麗船の寄らで過行く。」といふ一つの事、それを覆ふのに「霞を以てしたのです。高麗船といふものは如何にも春の景色に適當して居るものでありますのに、寄らで過行く。」と申しますから、見て居る人は長く其處に待つて居つたものと見えます。非常に長閑かな春の日の景色であります。

大原や蝶の出で舞ふ朧月。

丈草

大原の春の夜の景色であります。朧月夜に蝶が出て舞

大原
京都の北

芭蕉
本名は松尾宗
房、伊賀國の
前、江戸時代
正風の祖、元
禄七年(一七〇
四)歿

うて居るのです。「朧月夜に大原の景色を見ると、一面に霞んで居る。朧月でぼうつとして居る所に蝶が舞つて居る。蝶の色も何も能く見えない。たゞ朦朧たる中にちらちらと蝶の舞つて居る姿が見える。」さういふ景色を詠んだのです。

此の句を芭蕉が見まして、「成程これは佳い句であるらしい。併し、蝶が舞ふと云ふことはどうであらうか。」と言つた。之を今の言葉で言へば、「夜、蝶が出ると云ふことは不自然ではないか。」といふ意味です。そこで、丈草が「現に私は大原を通つて、夜、蝶が出て舞つて居るのを見ました。」と申しましたら、芭蕉が「それならば、此の句は實に秀逸だ、實に佳い句であ

切子
けり
かな

る。』と言つて褒めたさうです。此は丈草が實際見たと言ひ
ますから、夜、蝶が出て舞ふことがあるものと見えます。夜、
蝶が出て舞つて居るといふことが、神韻縹緲の趣を成して
るます。
蘇村 明並 新日本歌
子規 新日本歌

春の水山なき國を流れけり。

蘇村

所謂舊派の人は蘇村の句を好みませんが、此の句などは
舊派の人にも褒められてゐます。「春の水」と云ふのは俳句
の一つの題になつてゐます。春の水は春の川でも春の湖
でも何でも宜しうございます。温
かさうに流れて居る春の水を總稱
して春の水と申します。此處では川をいふ

沼波

沼波 環音自署

威風
官能

五カ

七七水



角 其 本 楓

のでせう。春の川が廣い、限りなく廣い平野を、遙に遠
所へ流れて居る所を見渡した景色であります。「山なき
國」と言つてありますが、若し之を「廣き野原」としたら如何で
せう。「春の水廣き野原を流れけり」
見て居る景色は同じでありますが、
「廣き野原」と「山なき國」とは、感じの上
に非常な違があります。實際描い
て居る景色は同じでも、言葉の遣ひ
方が大變違ひます。此の方が餘程
強い感覺を與へます。

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春。

其角

此などは其角の特徴の最もよく現れて居る豪放な句であります。江戸の繁榮を非常に誇大的に詠んだのであります。「寺の鐘などは、一度造れば千年も二千年も保存される。田舎などで、寺が出来て愈、鐘でも造つたといへば、非常な大事件であるが、江戸ではそんな吝けちなことではない。鐘が毎日一つ賣れない日はない。」斯ういふ大きなことを言つて、上方贅六の肝を挫いた句であります。釣鐘といふものと一寸此處へ持つて來た所は實に巧であります。「江戸の春は江戸の春景色で、春と云へば最も陽氣な時候でありますから、それを附けたのであります。」(俳諧講演集)

歌韻

五 春雨

興謝 蕪村

春雨や小碓の山貝のうらみほど
 春のやものうらみの葉と傘
 春のぬき屋敷の手毬うな
 椿落ちて昨日の雨をうけけり
 垣越へに物うちらうらも接あうな
 畑打つや勤うねをなまけうね
 春の海ひねもすのけりくうな

いかだしの蓑
 やあらしの花
 ころも
 蕪村

花衣

い
 け
 の
 葉
 の
 も
 こ
 ろ
 も
 蕪

蕪村筆蹟

五 春雨

春景
菜の花や月もあはれに
色あかりの美

六 潮の岬

杉村楚人冠

杉村楚人冠、
名は廣太郎、
和歌山市の
人、明治五年
生、東京朝日
新聞社監査役
兼編輯顧問
潮の岬の最
南端

とかくして潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついで一面の芝生が見る目遙に打續いて、其の間に薊蒲公英が咲いて居る。背の低い磯馴松がぼつりくと處々に立つてゐて、それに繋いだ牛の姿が如何にも春めかしい。村の少女子が此の芝生で鬼事でもするのか、陽氣な笑ひ聲が遠くから聞える。

右の方には、燈臺の白い壁が巍然として中空に聳え、左の方には、無線電信局と海軍の望樓とが、宛ら崖から落ちかゝ

るやうな處に立つて居る。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨の露はになつた巖が幾重となく列んで、之

に太平洋の大波がどうくと寄せては返し、返しては寄せて居る。

杉村楚人冠
僕等は今や日本本土の最南端の一角に立つたのだ。打開

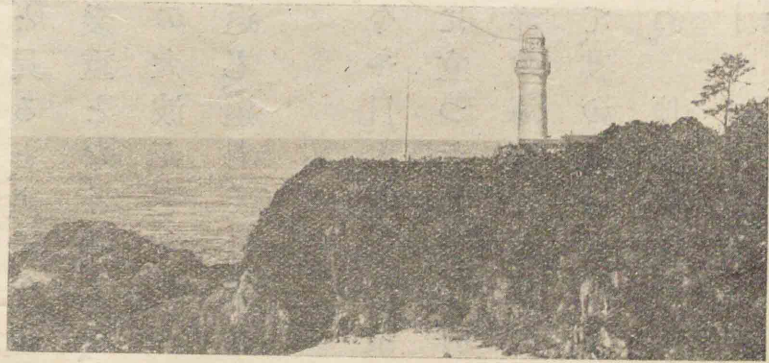
けた太平洋の海面には煙波が縹緲として、其の果はいつくとも覚えぬ。地圖を按ずるに、

此處から正南は丁度蘭領印度のニューギニーを隔てて、オ



杉村楚人冠

〔濠太刺利〕
 ーストラリアの大陸に相對し、東は遙
 Australia
 に太平洋の千波万波を越えて、北
 〔亞米利加〕
 America
 リカはカリフォルニア州のロスア
 California Los Angeles
 ン
 ジェルスまで、間を遮る物もない。日
 本の南端の一角といふと、如何にも世
 の中から棄てられた處のやうに聞え
 るが、其の實、此の一角が即ち日本と世
 界との接觸する處なのだから面白い。
 此の岬角に立つて居る白色不動の
 燈臺は、世界の船舶に其の針路を示し
 て居る。此處の無線電信局は日々夜



岬の潮

夜に世界と相語つて居る。殊に海軍の望樓に至つては、夜
 となく晝となく、苟も此の下に船の影さへ見えれば、内外何
 れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋
 ね、さては其の用向をきいて、傳へるべき處に傳へる。斯く
 世界的に出來た處に育つた潮の岬の人々であるから、其の
 中から濠洲や米國に出稼する者の多く出て來るのは無理
 もない。荒海を見馴れた眼には、對岸を隣國と心得て居る
 のかも知れぬ。

潮の岬の民は小さいながらも世界的の民だと思つて、ふ
 と自分のことに氣が付くと、今日四月二十二日、去年は、愈、ニ
 〔紐育〕
 New York
 ユーヨークの見物を終へて、明日大西洋に乗出さうとした

日、一昨年は丁度今頃、〔巴里〕パリから〔倫敦〕ロンドンへ向ふ途中、海峡を過ぎて、〔ケンツ州〕Kent州の櫻桃・杏・梨が今を盛りと咲亂れた中を走つてゐた頃である。

折しも望樓で頻りに信號旗が揚る。それとばかり友を促して急いで見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ、下げよ。」と忙しげに指揮して居る。其の隣の無線電信局では、ぱち、ぱち、ぱちと、けたゝましい音を立てて電信をかけて居る。

今までひつそりと静まり返つてゐた此の日本の最南端の一角は、俄に色めき立つて見えた。沖には通報艦の淀が行く。(へちまのかは)

鎌倉 星月夜

久米正雄
長野縣の人、
明治二十四年
生、文學者

唧なげきいふ

自修文

七 ラヂオ

久米正雄



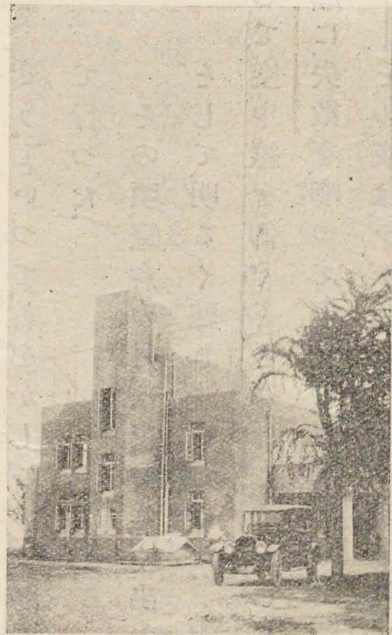
久米正雄

鎌倉へ移つて間もなく、ラヂオを聴取しようと思つて、或商會の技手に依頼して、器械の取付に着手したが、どうもうまくいかない。ので、何日目かの晩には、技手も落膽らくたんして、明日また来て、改めて試験してみせう。」といつて、首をかしげ、歸つて行つた。

その頃、鎌倉の月は夜おそく出た。そして、明るく輝き渡つてゐた。寝ねえないが、少し出初めた海風に、失敗を唧なげきつて微に身を顛よこたはせて泣いてゐるやうな氣がした。——その夜は、ラヂオのことばかり氣に

か、つて、よく寝られなかつた。

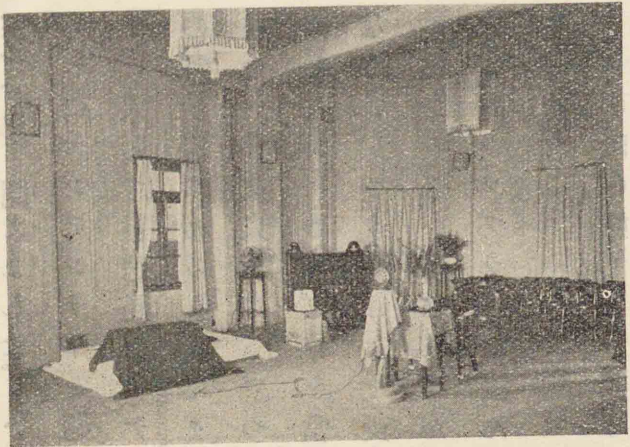
翌朝起きると、私はもう、ラデオファンといふより、立派な文字通りのラデオ狂になつてゐた。一體私は一つの事をし始めると、どうしても或程度まで仕遂げなければ氣が済まぬ性質で、前夜以來の失敗が妙に私を熱狂させた。私は空中線を仰ぎ、接地線を検し、器械を覗いて見た。そして、何よりも根本的の知識が必要だと思つて、いろ／＼な新聞や雑誌の通俗ラデオ講話といふやうなものゝを悉く讀んで、相當に新知識を得た。そして、技手の來るのを今か今かと待つてゐた。しかし、その日は、前日の失敗に氣落したの



東京中央放送局

フアン
熱中家

レシーバー
聴取器、受話器



東京中央放送局内

か、技手はとう／＼姿を見せなかつた。そこで、私は若し技手が來なければ、自分で一切やり直さうと思つたほど、それほど突詰めて考へた。

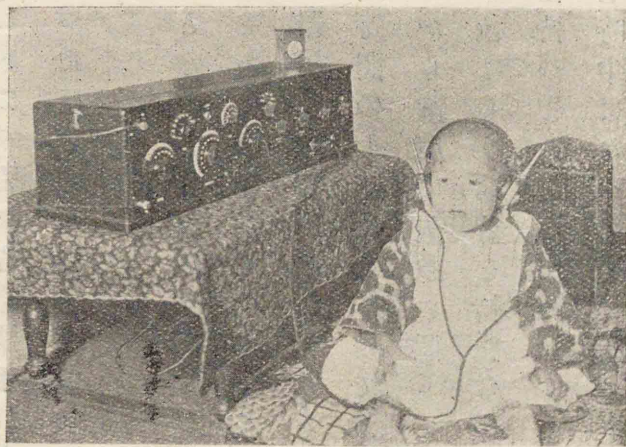
すると、その翌日午後四時頃に、待ち兼ねてゐた技手がやつて來て、すつかり器械を取替へて据付け、そして、放送時間の七時半を待つてゐた。が、前々から數度の失敗に懲りてゐるので、私はもう期待を持たなかつた。否、持つかまいとしてゐた。と、七時半になつて暫く経つた時だつた。レシーバーを頭から被つて、兩耳を蔽つてゐた技手が、大きな

コンデンサ
蓄電器
アナウンサー
放送者

ソプラノ
最高音部

聲で、「あ！聞えました。」といひざま、向ふの波長と同調にするために、
頻りにコンデンサーを廻した。すると、彼の耳の處にある受話器
から、果して放送局のアナウンサー Announcer
の聲が傍にゐる人達にまで聞えて
來た。「大丈夫です。やつと聞えて
來ました。さあ、これを當てて御覽
なさい。」さういはれて受話器を耳
へ當てると、いきなり耳が響くぐら
ゐに、高いソプラノが澄んだまゝ、聞
えて來た。 Soprano

その時の嬉しさ。前の失敗が長
かつただけに、眞に天にも昇るほど
興奮した。全くその時ばかりは、い



圖るのてい聽をオザラ

痛切
きはめて適切
なこと

壓搾
強くおし縮め
る

くら私が新奇好きだの、流行物をすぐ用ひるオツチヨコチヨイだ
のと、非難されても、何といはれても、何物にも代へられぬほど嬉し
かつた。全くかういふ嬉しさはファンでなければ味ふことが出
來ぬ。若しこれが自製器だつたら、どんなに痛切に感激すること
だらう。

この器械で、名古屋のが取れ、大阪のが取れたら、更にどんなに面
白からう。そして、その内には、それだけでは承知が出來ず、上海の
を取りたいと思つたり、米國のを取らなければ、虫が収まらないや
うになるかも知れぬ。さうなつては困ると思ふが、また何だか
宇宙を壓搾して自分の物にしたやうな気分は、逆も堪らないだら
うと思ふ。

何にもせよ、霽れ渡つた宵の空が夕榮に光つてゐる蒼深い中に、
纖く微妙な撓みをもつて張られてゐる空中線を仰ぎながら、それ

星斗

を通じて目に見えぬ電波が無限に擴がり傳はつて來ることを思ふと、全く神秘的な氣持がする。この不思議な氣持は、少し物心のついた少年時に、星斗爛たる空を仰いで、宇宙の神祕に驚いた時の心を蘇らしてくる。そして、それだけでも十分酬いられるやうに思ふ。

八 奈良の初夏

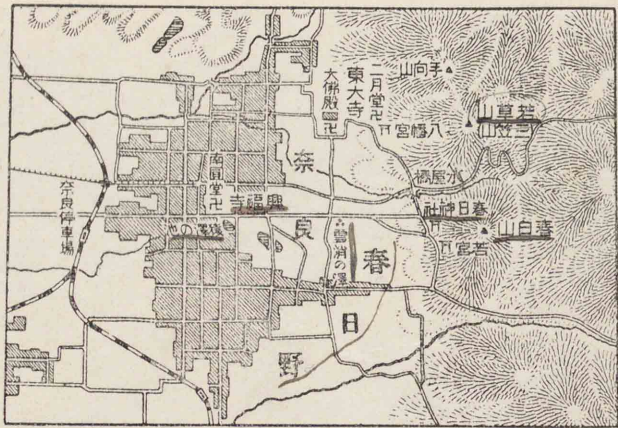
大類 伸

一 若草山

若草山！ まあ何といふ優しい名でせう。櫻も散つて、是から躑躅や藤の季節に移らうとする時、一本の木もない、あの撫でたやうになだらかな山一面に、若草の萌出た時、そ

大類伸
東京市の人、
明治十七年、
生、歴史學者、
文學博士、東
北帝國大學教

昔の人
大伴四繩
藤浪の
万葉集にある



して、若草の間をところ／＼山躑躅が鶯色に彩つた時、若草山の姿は實に優しい限りの眺です。

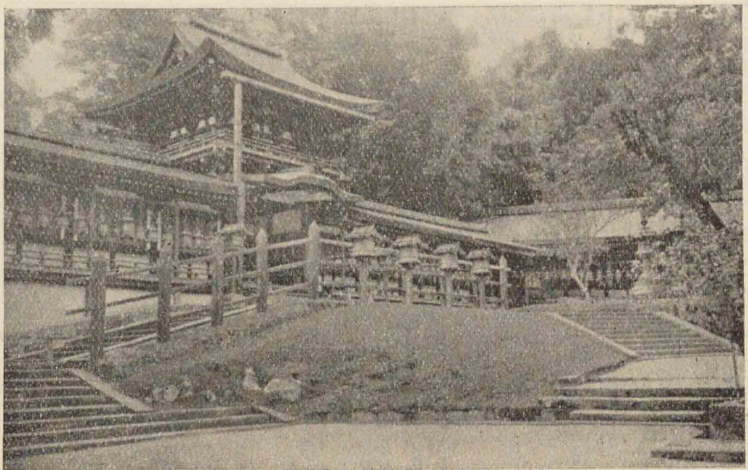
紫の藤浪が池水に咲きかゝる頃、私は嘗て若草山に遊んだことを思ひ出さずには居られません。昔の人も、

藤浪の花は盛りになりにつけり、
奈良の都をおもほすや君。

と歌ひました。藤の花の咲く頃、私は何時も奈良と此の歌と

大類 伸

大類伸自署



社 神 日 春

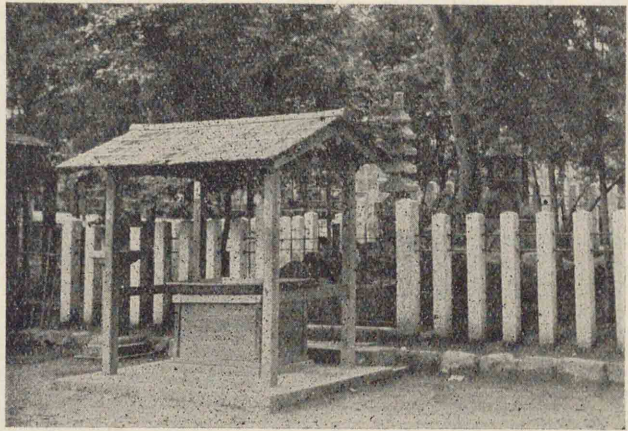
を思ひ出すのです。

若草山は奈良の町の東方に在る山で、近所の山には木が鬱蒼と茂つて居るのに、此は木のない、草ばかり生えた山で、散歩がてら登るのに丁度よい山です。若草の芽の出る前、此の山の枯草を焼く時の光景はなかなか壯觀で、寒い風が奈良の大路を吹捲くたそがれ頃、門に立つと、春日の森を越えて東の方

に火がちら／＼と見えるのは、忘れ難い旅の思出の一つではありませんが、五月の頃の若草山はそれにも増した楽しい眺です。其の頃、町の人々は大勢此の山へ遊びに來ます。そして、上方の風習として、年若い女は綺麗な長襦袢一枚になつて、山躑躅の咲亂れた山を登つたり降りたり、鬼ごっこをして遊び戯れたりします。旅の身の私



池 の 澤 猿



石 子 詣 の 塚

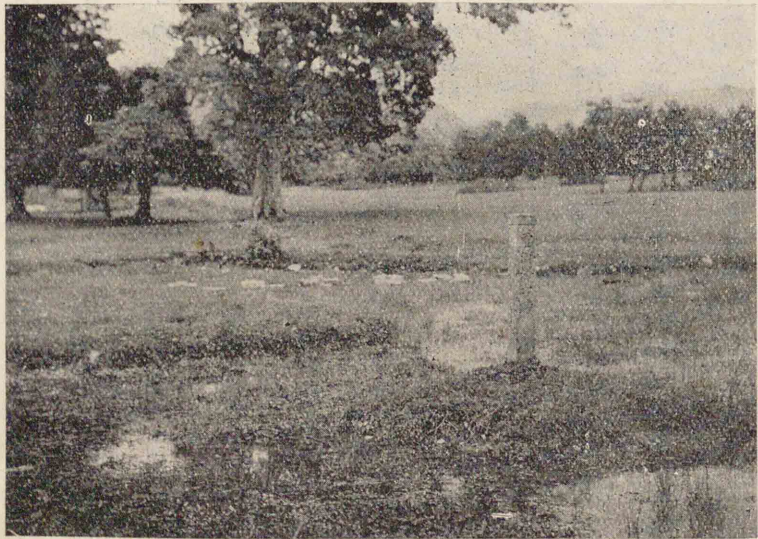
は、若草に腰をおろして、姑くそれらの光景に眺め入つたのでした。

二 春日野

奈良の附近には到る處古跡が多く、大きなお寺の屋根が森の間に見え隠れするのや、古い五重の塔が歴史を語り顔に霞んで見えるのや、畑の間に礎だけ残つて、其の石の割目に寂しく葶の咲出したのや、何れ昔の思出の種とならないものはありません。

併し、あの優しい眺の若草山の麓、そこは春日野と呼ばれ

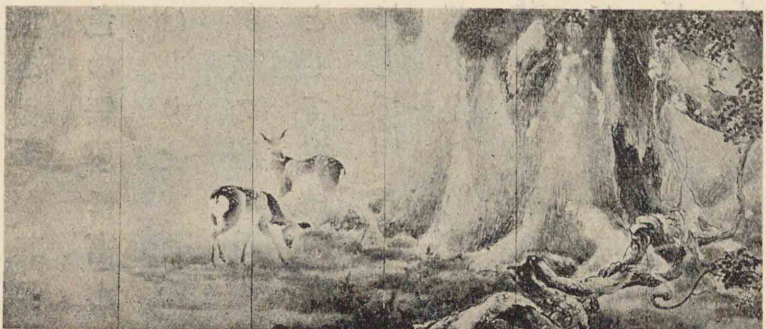
てゐますが、其の野ほど色の語草に富んで居る處はありません。可愛い無数の鹿、春日神社の眷屬として奈良の人々が大切にして居る鹿、そして昔は其の鹿に危害を加へると、其の人は生きながら地中に石埋めにされたといふほど大切にされた鹿は、今もなほ群をなして春日野



雪 消 の 澤

猿澤の池
奈良市三條通
の東端興福
寺の南にある

春來れば
崇徳院の御
製、風雅集に
ある



春日野 (高橋秋華筆)

に遊んでゐます。又今はすっかり俗
化しましたが、奈良名所の猿澤の池も
春日野の一部と見られてゐます。

猿澤の池から少し東に寄つて、可愛
い鹿の澤山遊んで居る緑の草原の間
に、雪消の澤と呼ばれる小さな池があ
ります。昔の歌にも、

春來れば雪消の澤に袖垂れて、

まだうら若き若菜をぞ摘む。

とありますが、奈良朝の昔に、あの優美
な衣を着けたうら若い少女達が、おの

が身の上にも似たうら若い若菜を摘んだのは、何處の池の
畔だつたでせう。今は紫の色ゆかしげな藤の花が長い房
を水に垂れてゐて、四邊には只新しい時代の人々の翳す赤
や白のけばくしいパラソルの色が目立つて見えるだけ
です。

併し、千年も前の春日野には、只少女の遊ぶ姿ばかりでな
く、もつと嚴しい光景をも其處に認められたのです。其の
頃、春日野には「とぶひ」といつて烽火を高く揚げる處があり
ました。是は戦争とか其の他國家に一大事の起つた場合
に、高く火を揚げて急を知らせる爲で、春日野を飛火野と云
つたのも、つまり此の理由からでした。そして、其の烽火の

春日野の
讀人不知、古
今集にある

番兵達も此の野邊を徘徊したのです。さればこそ古の歌にも、

春日野のとぶひの野守出でて見よ、

いま幾日ありて若菜摘みてん。

などと詠まれて居るのです。(史蹟めぐり)

相馬御風
名は昌治、新
潟縣の人、明
治十六年生、
文學者

九 綠蔭閑話

相馬御風

吉野
奈良縣吉野郡
更科
長野縣更科郡
井出
京都府綾喜郡

「風流を樂しむ花園ならで、後の畑、前の田の作物に志し、自ら鋤を執りて耕し、先祖の賜と命の親に懇ろを盡し、吉野の櫻、更科の月よりも、己が業こそ樂しけれ。朝夕心をとめて打向ふ菜種の花は、井出の山吹よりも好ましく、麥

の穂の色は牡丹芍薬よりも腹ごたへあるかと覺ゆ。朝顔より夕顔こそよけれ……」

一茶が「勸農の詞」でかう言つてゐるほどの意味でなくて、眺め樂しむといふ上からは、風流を旨とする花園も、收穫を目的とする菜園も同じである。觀賞を主とする樹や草の栽培も無論結構ではあるが、心して菜園の美を味ふことも捨てがたいものである。

豌豆の花、胡瓜の花、茄子の花、大角豆の花、玉蜀黍の廣葉、芋の葉の露、菜の花畑、麥の穂並、葱の花、何一つとして愛すべき趣を持たないものはない。季節々に變つて行く菜園の眺には、實利と享樂とのいみじい調和がある。收穫にばか

一茶
小林氏、通稱
は彌太郎、俳
諧、信濃國のし
人、江戸時代
後期、俳人、
五十七年六月
歿

り心を奪はれて、自分の耕し培ふ田畑の美しさに全然無關心であることが出来るであらうか、自分の植ゑた樹木の伸び榮える有様を見る喜は、決して單なる打算の結果ばかりではあるまい。そこに農作にいそしむ心の健かさがある。



苺

鮮かな緑色の葉蔭に、ルビーのやうな色をした苺の玉の鈴なりに實のる頃の苺畑の眺ほど、爽かな氣持を與へるものは少い。分けて露に濡れた緑の葉をかき分けて、あのみづくしい

紅玉を摘集める五月の朝のすがくしさは、多くの年中行事の中での最も嬉しい一つである。

わが庭に生りし苺を今日もかも、

摘みてまゐらす永病む父に。

これは先年父の最後の病を看護してゐた頃の歌である。父の死後、私達は毎年きまつて苺の初なりをもぐと、それを先づ父の靈前に供へることにしてゐる。

わが庭に生りし苺の初なりを、

もろ手に盛れる今朝のうれしき。

露しげき葉をかきわけて朝なく、

相馬御風自署

相馬御風自署

子等と我が摘むこれの紅玉。

今年もいつの間にか苺の實のる頃となつた。苺畑の垣の外には、昨日今日雛罌粟ひなけしの美しい花が、細長い莖かきもろともに快い五月の風に揺られてゐる。雛罌粟の花の美しさは無論愛すべきではあるが、私は更に、この花がぱら〜と惜しげもなくその美しい花瓣を振り落した後に、くり〜とした罌粟坊主のあのあどけない實を結ぶ様子を、妙にいちらしく思ふのである。

○

夏の川釣も私の最も好きな事の一つであつたが、四年前の八月、五歳になる男兒を亡くしてから、その記念のために、

私は釣といふことをふつつりと止めてしまつた。死の前日まで私の釣のお伴をして歩いてゐたあの子を思ふと、私は今でも胸を搔きむしられるやうに悲しい。彼の持つ小さなバケツBucketの中に水を入れてやり、二三尾の鮒を泳がしてやると、彼は何かも忘れてそれを楽しんでゐた。が、暫くして彼は何事にかひどく驚いたやうに、頓狂な聲で私を呼んで言つた、「おとうちゃん、鮒がバケツを食つてるよ。」なるほど、バケツの内側に口をつけてぱく〜やつてゐる鮒の様子は、



川 釣

幼い彼の頭にさう思はせるのに十分であつた。釣に夢中になつてゐた私も、その奇抜な訴には、何もかも忘れて笑ひ興ぜずにはゐられなかつた。



相馬御風

彼はその日の夕方突然病み出して、その翌日の夕方にはもう此の世のものではなかつた。しかもそれは、妻が或近親者の訃に接して他行してゐた不在

中の出来事であつた。その子の名は元雄といつた。

わが元雄なが心地よきわらひ聲

ふたゝび聞かんすべなきものか。

母の行き慕ひて泣きとどめ得ば、

かゝる歎きはせざらましものを。

母を呼び母を待つだにあはれあるべきを、

もだしてあはれいにしなれはいとしも。

私がむちやくちやに好きであつた釣を止めることの出來たのは、全くこの子のお蔭である。今ではその季節が來ても、もう釣の事などは思ひ出しもしないやうになつた。私が釣を止めてから、不思議に私の子供達も釣に行かなくなつた。因縁は妙なものである。(綠蔭閑話)

宮崎丈二
千葉縣の
人、
明治三十一年
生、
詩人

一〇 六月の朝

宮崎丈二



部屋々々を開け放つて、
初々しい朝の光の中に、
爽かな濕りをもつた朝の空氣の中に、
かすかに揺れる草木の戦ぎよ。

罌粟の花は萼を拂つて

静に開き、

微風にも耐へずなよ／＼と

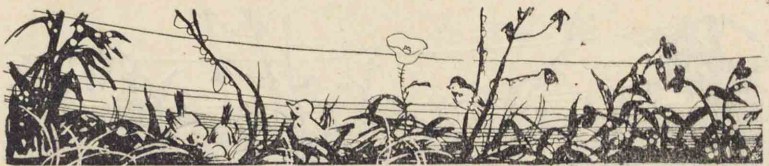
あてやかな姿して立つ。

開かうとして上向きに首を伸ばした蕾、
棘ある萼に固く身を守る蕾の數々。



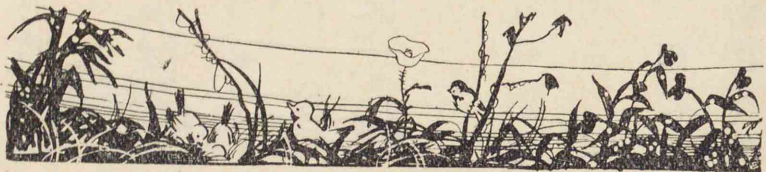
紫露草は朝の濕りに露を含んで開き、
オランダ苺は敷かれた藁の上に色づき、
萱は添へられた竹に捲きつき、
測り知れない空間に生命の觸手を延べて這
昇る。

蔓のある草、また蔓のない草、
點々こ赤や白や黄や紫の葉を附けた草、
まだ生えたばかりの雙葉の草。



繁みの影からひらくと蝶が舞つて来ては、
花々をおごづれる。
群れてゐる蜂や蝸の類、
或は小さな甲虫の類。

この間隣の軒端で生れたばかりの子雀は、
もう親雀と一緒に降りて来て、
餌をあさつてゐる。
翅を震はす可憐な身振、
親雀に寄添つて。
親雀は注意深くあたりに氣を配り、

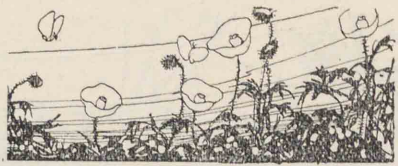


うまさうな餌を拾つては子雀に與へる。
傍の水盤の中、
もういゝエ合にふるびて縁を帯びた水の中
には、
子を孕んだ緋目高が隠見する。
庭を圍む葉櫻の繁り、
葉を透して明るい空と屋根々々、
屋根々々の向ふに遠く高く
崩えさかる生命の冠のやうに

旺盛する森よ。

お、この六月の朝の目覺めの快さ。
部屋々々を開け放つて、
初々しい朝の光の中に、
爽かな濕りをもつた朝の空氣の中に。

(現代日本詩選)



符衝の雨
車軸を流す
類語

一一 雨の趣味

黒田 鵬心

雨にはいろいろの種類がある。しとくと降る春雨もあれば、盆を覆すやうな夏の夕立もあり、淋しい秋の雨もあ

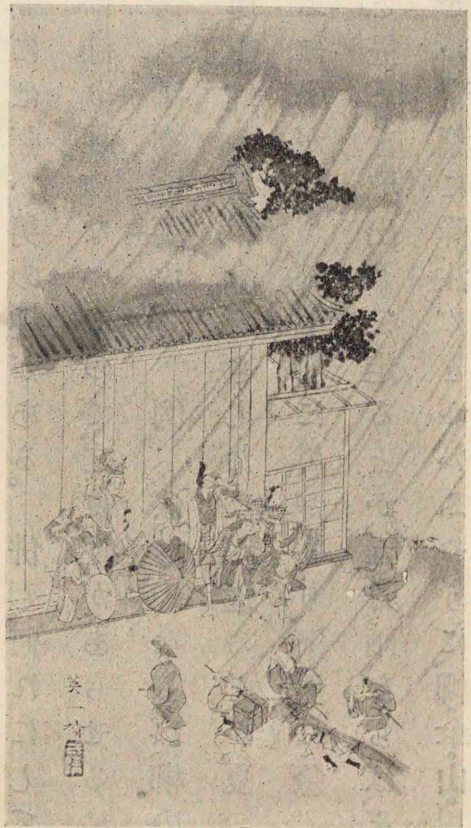
黒田鵬心
名は朋信、東
京市の人、明
治十八年生

雨の趣味

れば、寒い風を伴ふ冬の雨もあり、又鬱陶しい五月雨もある。さうして、其の種類に従つてそれと違つた趣味を持つて居る。柳の若芽に煙るやうな春雨の長閑けさには優しい女の趣があり、乾ききつた河原の石をも轉ばすばかり勢込んで降る夕立には強い男の趣がある。併し、何れにしても雨は單獨には餘り趣のないもので、之に趣があらせるには何かの背景又は添物を要する。例へば、春雨ならば、柳の木があつて、其處を蛇の目の傘をさした女が通るとか、夏の夕立ならば、向ふに山があつて、手前に川があり、河原に急ぐ男が用意の蓑と笠とを取出して走るとか、五月雨ならば、それがみづくしい青葉に降注ぐとかいふやうに、柳傘・山川・蓑

青葉などの背景や添物があつて、ここに始めて雨の趣味が發揮されるのである。

雨の趣味は動の趣味である。新緑などは全然靜の趣味であり、花も落花の場合を除けば靜の趣味であるが、雨はいくら靜に降つても動の趣味である。随つて時間的の趣味を持つて居る。花や新緑は一目見ればすぐ其の趣味が味



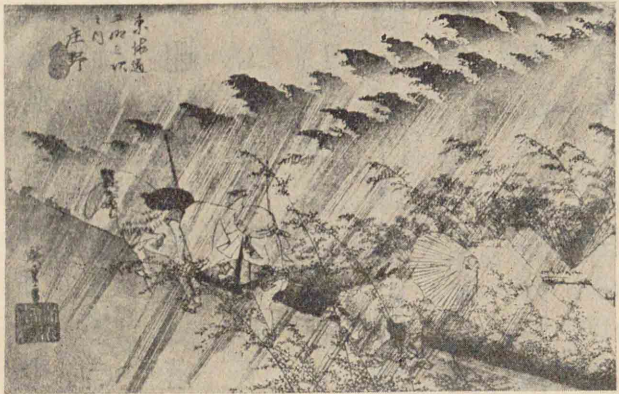
(筆 靖一 英) 雨 驟

動

はれるが、雨は少くとも數分間續けて見なければ其の趣味を味ふことは出來ぬ。夕立のやうな性質上短時間の雨で

も矢張さうである。まして春雨・五月雨・秋雨などに至つては猶更のことで、數時間も降りつゞいて居る中に、おのづと其の趣味が味はれるのである。

雨はもとく、水滴であるから、花や青葉のやうに明瞭な形や色を持たぬ。其の代りに、花や青葉の持たない所の音を持つて居る。花や青



(筆 重川 国) 雨 の 野 庄 道 海 東

能く好む

庭もさか

木の葉のたふ

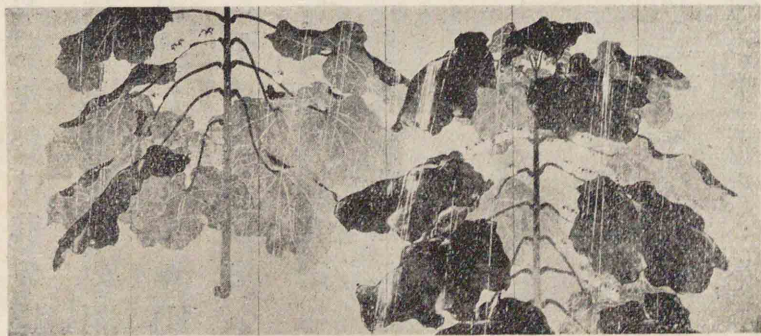
音さけは

しつかに

かよふ

なりけり

葉も風によつて多少の音を出す、それは寧ろ風の趣味で、花や青葉其の物の趣味ではない。落花も落葉も詩に歌ふほど音のあるものでない。之に反して、雨は天空から降つて来て、必ず地上の何物かに當つて、可なり高い音を立てる。そして、其の音が雨の趣味の少からぬ部分を占めて居るのである。春夜、部屋の中にて、しとくと降る雨の音を聞けば、少しも外を見ないでも、十分に春雨の趣味を味ふこと



(草舟霞江廣) 雨ぐ注に葉潤

が出来る。

戸外に居る時は別として、室内に居る場合には、誰しも先づ軒又は庭の木の葉に當る音によつて雨の降出したことを知り、其の趣味を味ふものである。雨の程よい音を聞いて居ると、何となく落着いて、一種言ふことの出来ない穩かな感情しんまの起るもので、親しい友としんみり話す時などの情調に最もふさはしい。

黒田鷗心自署

黒田鷗心自署

雨の色

雨の色は餘り趣味に關係しないが、雨によつて濕うるされた色は甚だ趣味の深いものである。新緑なども雨に濡れると殊に光澤を増し、幹や枝も全く前と見變つた良い色とな

芭蕉 雨の音
聴しぬる

る。又石は雨に濡れて始めて其の趣味を發揮するものである。随つて石燈籠や飛石は雨に濡れると非常に良い色になる。土は石ほどではないが乾いた時よりは雨に濡れた時の方が餘程趣が深い。併し、此等は打水をしても同じやうになるから、殊更雨の趣味とは言へないが、雨に附随した趣味としては主なものである。(人生と趣味)

一二 梅雨ツユばれ

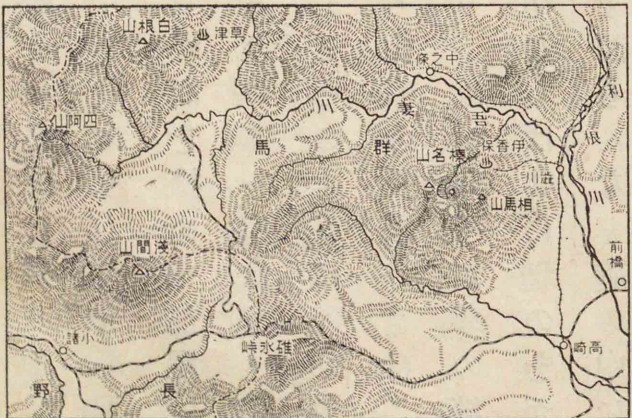
幸田露伴

七月四日。昨夜感慨に満ちて少しも眠る能はず、漸く明方にまどろみたるまゝ寝過して、九時頃起出でたり。大雨降りしきりて、何事をなすべしとも思はれず。天井より雨

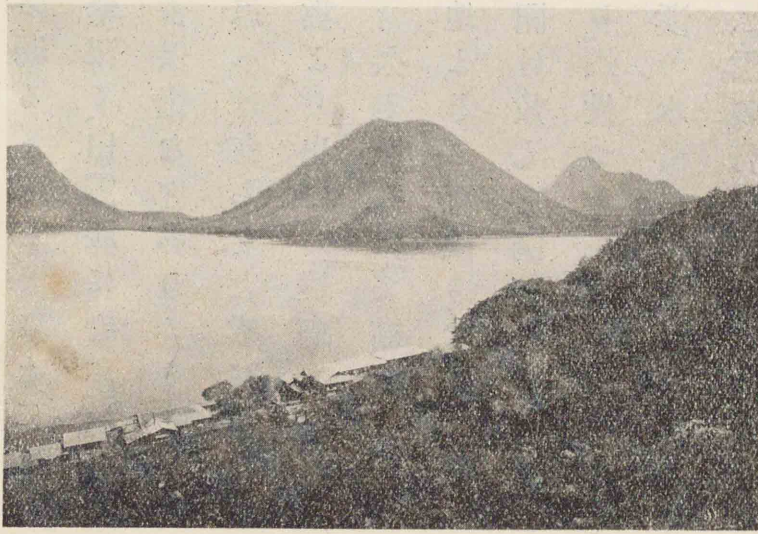
幸田露伴
名は成行、
京市の人、
應三年生、
學博士
文慶東

淺間山・相馬
山
ともに群馬
縣、榛名山の
榛名
一名富士
榛名山の主宰
伊香保嶺
榛名山の連嶺

の漏るゝなど、まことに風流なり。十一時頃晴れぬ。遠山翠深く、白雲腰に纏ふ狀面白し。淺間山・相馬山・榛名富士・伊香保嶺などありくくと見ゆるかと思へば、忽ちまた雲に隠れ、忽ちまた雲より出づ。變幻出沒眞に妙なり。久しき雨にて晴れたるなれば、心地よきこと限りなく、障子からりと開け放して、例の古き机によりかゝり、頬杖つきて寂然と靜坐し、鳥の聲溪の水音に耳を澄まし、青空に行通ふ雲の行方など眺めやる。折しも



百鳥
滯教 孔子
道教 老子
莊子 莊周
名は周、支那
上代の哲學
者、夢に胡蝶
となつたとい
ふ



士富名榛と湖名榛

若葉にそよぐ風に乗りて、ひらひらと飛來りしたゞ一羽の蝶、我が面を掠めて部屋の内に入りけるを、追はずもあるべしと、そのまゝに任せつ。さても山家の長閑けさはここのなり。汝は莊子が夢の精か、それならば共に世のをかきさを語らんなど、胸の中に戯れ思ひて、無心有心の間に遊ぶこの虫の羨しさよ。露

夏川や何處か
て笛を吹いて
居る
露伴

夏川
何れ
さう笛を
吹いて居る
露伴

讀筆伴露田幸

朝露に
松尾芭蕉の句

を食ひ霞を喫し、翻々として執着の煩惱を離れ、何事をも二つの翼に委ねて、厭はしき處をば去り、嬉しき處には遊ぶ自在の身のをかしさよと感歎しつつ、振返り見れば、またひらひらと飛んで、机の前に投げおきたる一葉集の、朝露によごれて涼し瓜の泥。といへる句の上に止まりぬ。焦茶色の羽美しく、行儀よく並びし紋見事なり。何をかなすらん、二三分ばかりのしなやかなる鬚の如きものを卷舒して、紙に觸れしむるその狀可愛げなるに、我が動かば恐れ驚きやせん

と、我はたゞ一心に眺めつゝありし間に、つひに眠に入りけるが、雞の聲に覺めて、思はず頭を擡ぐれば、我が肩よりひらりと飛ぶものあり。何ぞと見ればかの蝶なり。

飛ぶ蝶に我が俳諧の重たさよ。

この句我が意を得ること深し。

梅雨ばれに硯の乾く眠さかな。

など、つまらぬ興もその時は面白かりき。(枕頭山水)

一三 即席三題

一 いのち

番茶でも飲んで、ゆつくり新聞でも讀まうと思つて、下宿

の小母さんの部屋に行つて、火鉢に懸つた鐵瓶に手をかけた時、私の視線はふと傍の丈の低い屏風で圍まれた新聞紙の上に落ちた。

芥子粒に、ほんの申譯ばかりの尻尾がくつついたやうな黒い微生物が、細かく刻んだ桑の葉の上で微に蠢いてゐた。それは蠶の兒であつた。

それから三日ばかり後の夕方、友達がやつて來たので、神戸の親類から送つて貰つた瓦煎餅を二人でばくついてゐたら、澁いお茶でも啜りたくなつたので、小母さんの部屋に行くと、子子を日干にしたとでも思へた先日三日見ぬ世の中は三日見ぬ間に櫻のなの蠶の兒は、三日見ぬ間にずん／＼成長して、盛に桑の葉を喰つてゐた。

三日見ぬ世の中は三日見ぬ間に櫻のな(大島蓼太)

それから蠶の兒の成長に興味を感じて、朝起きて顔を洗ふと、すぐ小母さんの部屋へ、何か大した奇蹟でも見るやうな氣持で、それを見に行つた。

蠶の兒は一晚の内にも目に見えるほど大きくなる。頭が芥子粒から魚の卵、魚の卵から南京玉ぐらゐの大きさになり、初は小さな尻尾だつたのが、今ではもう六分ぐらゐの胴と見られる部分が出来て、頭と胴との區別がはつきりつかないまでになつた。新聞紙の床が一つから二つ、二つから三つにもなつた。小母さんは、まだ八つにも九つにも分けなければなりません。」と、さも當り前だといつた顔付で話した。

一塊の土くれから春が蘇つて、やがては盛夏の繁茂を誇るやうに、一握の桑の葉にまみれついた小さな生命が、恐怖を感じさせるやうな勢で成長して行く。

もう半月もすると立派な繭を作るに違ない。黒い微粒子が美しい繭に變化する、それは神祕である。

蠶の卵の中の生命は、自然の中にある大きい生命の本原と脈を通じてゐるらしい。

蠶の生命を通して、私は自然の中に溢れてゐる生命に觸れる。その生命は万物をすく／＼と伸上らして行く。蠶が眠つては大きくなるやうに、生命は衣裝を附けかへては、永遠に成長し進化して行く。その力は實に不可思議であ

る。私はそれに驚異を感じる。原始人が谷の峽間から空
行く雲を眺めて驚異を感じたやうに、私は自然の中に溢れ
てゐる大きくて強くて而も深い生命に對し、敬虔な心を以
て禮拜する。

蠶の兒は今日も頻りに桑の葉を喰つてゐる。(松田生)

二 感激の生活

力を籠めて鋏を下す。其の刃先にかぐろい土が掘返さ
れる。噎せるやうな土の香が鼻を衝く。言知れぬ雄々し
い男らしい氣持になる。又鋏を振上げる。刃先がきらき
ら陽の光を浴びて光る。「俺は強いんだ。俺は偉大な開拓

1. 勞働ノ尊サ
2. 百聞一見ニ若カス
3. 都會より田舎へ

者だ。おゝ此の鋏の刃先にこぼれる土の色よ、香よ、さうし
て俺の身内に溢れる強い力よ。」聊かの不満もない此の生
活は、本當に感激に満ちた一日々々である。

再び雙の腕に力を籠める。鋏の柄は碎けるばかり強く
握られる。ぐさつ……一塊の土が掘返されて崩れる。又
掘返されて崩れる。陽はまだ山の端を離れて何程も昇ら
ぬ。土は其の光を浴びて赤味を帯びて居る。其の赤味が
何となく落着のある男らしい強さを思はせる。土の其の
色が堪らなく嬉しい。是が終日の伴侶だ。鋏は何時まで
も足の下の廣い土を掘返す。其の度に腕が高鳴る。
おゝ何と幸福な生活だらう。一打々々に従つて蘇る土、

鋤振上げた時の溢れる力、さうして疲を覚えて伸をしなが
ら眺める富士の姿、物皆が總べて感激を起させ、心を平安に
する。

周圍に聳える山々は、何時もなごやかな色を見せてくれ
る。新緑といひ、清泉といひ、行交ふ雲といひ、青澄む空とい
ひ、何れも母の優しみを以て接してくれる、何時でも爽かな
感じを惠んでくれる。自然の友のさても泪ぐましく尊い
ことよ。

畦に立つて強く呼吸する。冷たい清い空氣が、肺や心臓
の中に沁込むやうに思はれる。心が廣々として來る。斯
うして私はより強くくくなるのだ。

感激の泪がこぼれる。美しい泪！ 尊い泪！ あゝ生
きて行く幸福よ、生活に満足する強い感激よ。「俺は強いん
だ、俺は偉大な開拓者だ。」此の強い信念の下に、一日々々を
暮らして行く幸福と歡喜、それは他の者の味ひ知らぬ所、洵
に尊い生活である。

力を籠めて鋤を握る。溢れる力を振つて土を打つ。か
ぐろい土が蘇る。懐かしいく土の香が噎せかへるやう
に漂ふ。(中學世界)

三 鮒

何氣なしに不圖池を覗くと、鮒は音も立てずに、すうと水

視野
眼
界

底に沈んで行つて了つた。私は軽い失望を感じたが、じつと庭石の上に佇んでゐた。すると、頓て鮎は菱の葉蔭から再び浮いて来て、忙しく口をぱくくやつて居る。其の圓い口は空氣と水とを半々に吸うて居る。雨上りの淡く濁つた豊かな水は如何にも甘さうだ。菱の葉も生々として、露を載せたまゝびたりと水の面にくつついて浮いて居る。「なぜあんなに忙しくして居るんだらう。口なんか閉ぢて、ゆつくり泳ぎ廻つてたらいゝのに。」私は斯う思ひながら、其の赤味（目に見えぬ）がかつた黒い背を見詰めてゐた。不圖鮎の姿が私の視界から消えて、池の底に、明るい空と圓いぼてくしたちぎれ雲とが見えた。髪の伸びた私の顔も見える。眼

を舉げると、鮎は池の面に散つて居る萩の花に大勢して戯れて居る。私はいきなり足下の土塊を拾つて投げつけた。どぶんと音がして、水が五寸ばかり跳ねあがると、もう鮎の姿は見えない。秋風に漣を立てて居る池の面には、白い菱の花が淋しう咲いて居る。私は汚れた手を水の中でがばがばさせて居ると、指が吸ひつかれるやうに感じた。私は鮎の奴だなと思ひながら、淡い驚きと喜びとを隠して、そつと心の中で捉へてやらうと決心した。注意深く迅速に持つて行つた手に、くすぐつたい鱗の感觸（きんわり）——ぱちやりと水が顔に跳ねて、柔に、それでも強く、鮎はぬるりと私の掌を遁れた。（中學生）

木曾
長野縣、木曾
川沿岸一帯の
稱

木曾義仲
源義賢の子、
壽永三年(二八
四)歿、年三十

自修文

一四 木曾の木山

木曾へくと皆行きたがる、

木曾にや木山があればこそ。

是は名高い木曾節の一つです。木

曾は皆さん御存じの通り信州の山奥

で、昔、木曾義仲といふ豪傑が生立つた

處、木曾川を挟んだ山又山の山里です。

そして、其の山といふ山には、天下の名

木曾の類が晝なほ暗く生ひ茂つてゐ

ます。

木曾の名木曾に榎

杜松羅漢柏に高野槇



(筆観静島綱) しはけい

之を木曾の五木
と云つて、五木の
中の一本でも無
断で伐つた者は、
昔から打首にな
つたものだと言
傳へられて居る
くらゐです。明

治神宮の御用材は、此の木曾の御料林から伐採されたものが多い
のです。

木曾の名所は、棧・寢覺

山で高いのが御嶽山。

御嶽山にこそ登りませんが、木曾の名所の二つだけは見物

御料林
皇室御所有の
山林
伐採
さりとること
御嶽山
長野縣の西
南、海拔三
六三メートル

木曾街道
木曾路ともい
ふ、長野縣の
南に岐草西
の境に至る
蜀の棧道
支那四川省
嶮しい山道に
架けてある
棧

棧や命をから
む葛かづら
芭蕉

しました。次に項を分けて旅行中の思出を書いて見ませう。

一 木曾のかけはし

木曾に行つて先づ驚いたのは文明の力でした。「木曾街道は日本第一の難所で、蜀の棧道にも比すべき程の處だ」と昔話に聞いてみました。所が、今では汽車が通じて、芭蕉翁が、

かけはしや命をからむ葛



芭蕉翁の句の碑

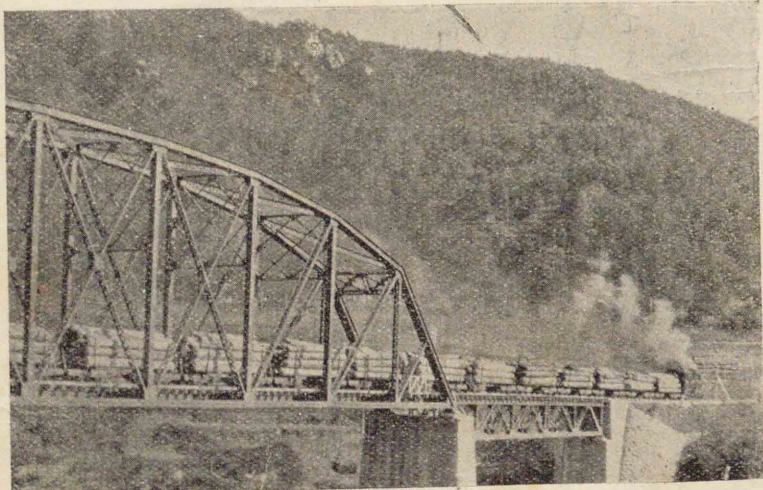
と詠んだ木曾のかけはしは、現在では立派な吊橋に代つてゐて、命をからんで渡したといふ葛の棧などは跡形もなく、只苔蒸した芭蕉翁の石碑が一基、崖の上に昔

中央線
東京驛から山
梨・長野・岐
の三縣を經て
名古屋驛に至
る國有鐵道
上松
駒ヶ嶽の西麓

を語つて居るばかりです。

二 森林鐵道

中央線上松驛から分れて、小川の伐採地まで十二哩ある森林鐵道は、盛に運材をしてゐます。線路は河に沿ひ、谿を渉り、頗る難工事であつたらしく見えます。總豫算約五十万圓。最も急な個處は、二十分の一の勾配と申して、二十間に一間ほども高くなつて居るのです。それゆゑ、普通の乗客は一切乗せません。上りは空車を機關車がほつくと太息を吐



木曾の森林鐵道

平氣の平左
平左衛門
孫左衛門
ともいふ
人名に擬
成語した



材木の曾木たれき出伐

此の汽車にも乗ることが出来ました。

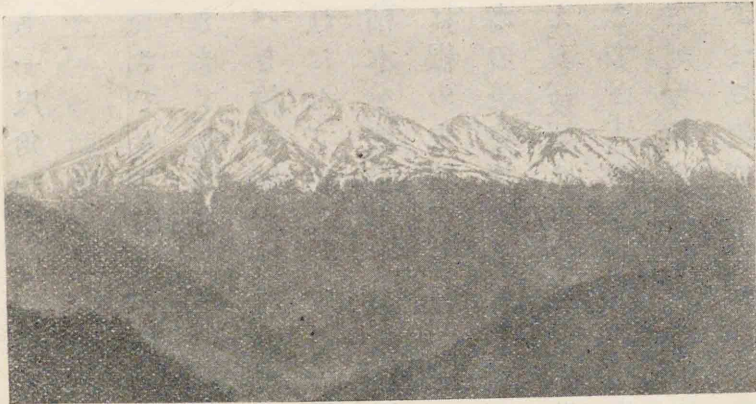
三 小谷狩

此の森林鐵道が出来るまで——徳川時代からつい近年まで——運材は總べて谿川の水を利用して、そろり／＼と流したものださうです。之を小谷狩と申します。谿川に木材で堰を作つて水を溜めては、大勢の人夫がてんでに鳶口を持つて、エンヤラヤーヤ

いて曳いて行きますが下りは山なす木材を平氣の平左で運んでゐます。此の種の鐵道はまだ我が國には餘り多くは敷設されてゐないとのことです。私は幸ひ其處の技師に知人があつたので、

算を亂す
ちい／＼にな
る
木曾川
伊勢海に入
る、長さ四十
六里

文明の利器
來た便利な器
械



山 嶽 御

ットコセーと、それは／＼優長なものだつたさうです。而も一朝洪水でも出ようものなら、幾万本の木材が相撲ち相衝き算を亂して木曾川の本流さして落下するので、小谷狩の運賃は、木材一石につき、平時が三十錢乃至三十五錢もかゝり、流材その他の被害を受けた場合を見積れば、四十錢乃至四十五錢もかゝつたものださうです。所が、森林鐵道によれば、驚く勿れ、一石の運賃僅に十五錢。流石は文明の利器だ！と、私はこんな山奥で感心しました。木材一石といふのは、十立方尺即

ち一尺角一丈の方柱のことださうです。

四 枯損木

さても、其の後木曾の木山を眺めてゐますと、時に枯木が目に着きます。「枯木も山の賑ひ」といふ諺はありますが、天下の良材たるべき檜の枯木は其の實甚だみじめな感を與へます。「どうして枯れたんでせう。」と技師に問へば、技師の答が振つてゐます。「山では枯木を被壓木または枯損木と申します。苗木に傷があつたか、又は根の末端が岩石にぶつつかるか、兎に角故障が起つて、一時その木の榮養状態が悪くなります。すると、生存競争の世の中です。ねえ。」と、技師は「生存競争の世の中」といふ言葉に力を入れて、さして申しますには、「周囲の樹木は此の機を逸せず、成長し勝つて、前後左右から其の木の所に小枝の翼を張つて、遂に其の木の梢を被ひかぶせるのです。御存じの如く樹木は日光によつて生きて居るの

被壓木
おしつけられ
た木

逸せず
失はず

衣川
今の岩手縣に
ある

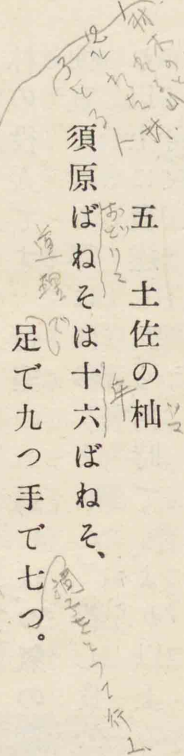
須原
上松の北約三
里の小驛
ばねを
跳衆、踊り子

在來
これまで
新参
古参

ですが、其の大切な日光を遮られるから堪りません、遂に被壓木となり枯損木となり、哀れや衣川の辨慶然と立往生の悲劇を演ずるに至るのです。

あ、諸君、油断して學事を怠り、人間の枯損木となつては、個人のためにも國家の爲にも、取返しのかね損失となります。

五 土佐の柚



須原ばねそは十六ばねそ、
足で九つ手て七つ。

こんな唄を歌ひながら、朝から晩まで、ごつしり／＼と木を挽いて居る樵夫を、山では柚と申します。木曾の柚は古來信濃美濃飛驒あたりの者に限られてゐたさうです。然るに、最近或山で試に土佐の柚を二三十人傭つて來て、在來の柚には一石の製材に十一錢づつの賃金を拂つてゐたのに、新参の柚には十三錢づつ拂ふこ

抗議
反對の意見を
主張すること

新参
古参

伎倆
うてまへ

激甚
いどくはげし
覺醒
目もさめるこ
と、氣が付く
こと
能率
効果の割合

とに致したのです。さあ大變、祖先傳來お山の御用を承つて居る私共を、それは旦那様、全く私共をお踏付け遊ばすといふものです。と、今にも同盟罷業をしかねまじい劔幕で、所長に抗議を申込んで参りました。

所で、所長の返事が面白い。「御尤もです。併し、我々は帝室御料林の役人です。帝室のお爲には、お氣の毒ながら貴公方ばかりの便宜を計る譯には参りません。若し貴公方の伎倆が外來者のそれ以上に發達したら、何時でも、より以上の賃金を出します。まあ、姑く彼等の手並を拜見されたがよからう。」

競争激甚な地に育つた柚達は、第一使用する道具からして違つてゐました。「成程！愚圖々々してゐたら、自分共は柚の枯損木となる所であつた！」と、茲に始めて覺醒して、在來の柚先生方も奮勵一番、頻りに能率の増進に志して居るといふことです。

潤葉樹
葉の廣い樹

仔細に
こまかに

万緑云々
あたり一面に
青い草木の繁
つて居る中
に、處々紅い
色の見えるこ
と
亭々
高く立つさま

六 潤葉樹

檜楨の類を針葉樹といふのに對して、楓、柏の類を潤葉樹と呼ぶことは、諸君既に御承知の筈です。木曾の木山は言はば全山針葉樹を以て覆はれてゐますが、なほ仔細に之を調査すれば、約二百分の一は潤葉樹が雜つて居るさうです。夏季はさほど目立ちませぬが、秋もはや半ばを過ぎれば、此等潤葉樹は一時に紅葉して、万緑叢中紅點點實に繪も及ばぬ美景を呈するとのことです。

亭々として天を摩するばかりの針



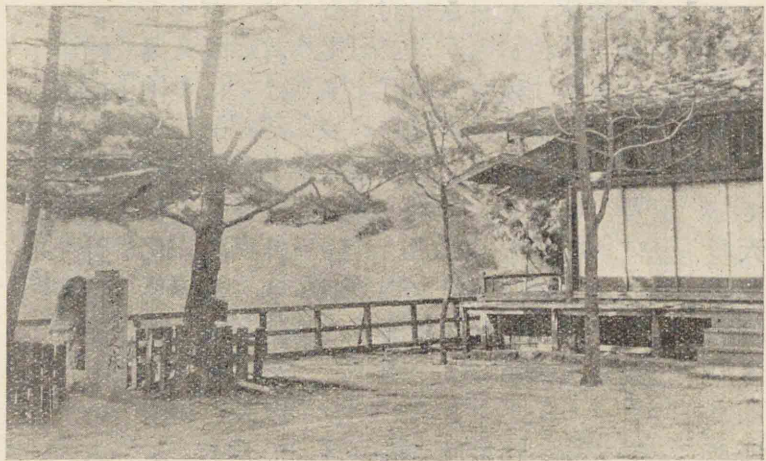
木曾の覺醒の床

蟲々
真直に立つさ

憧憬
あこがれ、心
を引付けられ
ること

寢覺の床
上松驛の南十
二町

臨川寺
寢覺山とい
ふ、臨濟宗



臨川寺の境内

葉樹の中の此等潤葉樹は、麻に連れ
る蓬よもぎと一般地上幾十尺、小枝一つさ
さず、蟲々として是亦良材たるべき
外觀を粧よそはうてゐます。日光に對す
る憧憬——生の要求——諸君、一木
一草の間にも、油斷も隙すきも許さぬ血
の出るやうな激烈な競争が行はれ
て居るのです。

七 寢覺の床

上松を中心として、木曾の棧と殆
ど同じ距離、即ち凡そ十町の下流に、
名高い寢覺の床が横たはつてゐま
す。臨川寺の境内から瞰み下せば、懸

奄々
絶えなくなき

向上心
益々進歩しよ
うとする心
出馬
出かけること

崖が數十丈、奇巖、怪石が淵を圍んで、天下の名勝たるに恥ぢない絶景
です。人毎に崖を傳ひ、氣息奄々あきあきとして、床とらのあたりに撰な寄り立寄
り見物します。

木曾の御嶽山は夏でも寒い、
袷あしやりたや足袋添へて。

夏でも寒い御嶽山の麓、木曾の溪流一帯の地は避暑旅行の適地で
す。特に針葉樹の森は向上心を刺戟しすることが少くありません。
諸子の御出馬を望んで筆を擱おきます。

(附) 見せたいもの

向ふも小山、裏も山、
山で育つた僕でさへ、
今年の夏に見に行つた

木曾の木山が忘れぬ。

山また山の深みどり、

空のみどりと合ふところ、

眞綿のやうな白雲が、

ふはり／＼と浮いてゐた。

五木の森に分入れば、

晝も小暗い木下闇、

闇を透して木鼠が

かはい、目して僕を見た。

あ、あの山の美しさ、

木鼠
栗鼠(リス)の
別名

百田宗治
大阪市の人、
明治二十六年
生 詩人

あ、あの森の氣高さよ、
村で自慢の檜山
七八百も集めたら。

今朝木曾からの繪葉書に、

「五木に交る雜木ども、

驚き顔に紅葉した。

見せたいもの。」と書いてある。

6.15.

一五 歸り行く勞働者

百田 宗治

一人の人間が私の前を行く
ぐしや／＼になつた頭髮

秋

日にやけた強さうな皮膚
 廣い肩幅 汗みどろになつた汚れた着物
 —だが その腕はどうだ
 そのふくれ上つた力瘤は
 その大きい掌はあつた
 そして あの足どりを見る
 しつかりと地面を踏みしめて行くその足どりを
 一歩一歩
 その地面との強い接着いた接觸はどうだ—
 彼は今河岸の荷揚場から来たのだ

感激

中谷徳太郎
 東京市の人、
 文學者、
 十九年歿、
 年大正三

力と汗の一日の勞働を終へて
 その家路に着いてゐるのだ
 妻と子供の待つてゐる楽しいその家へ
 入日は彼に一杯に照り
 影はながく地上に曳いてゐる
 あゝ萬物この夕陽に照り輝く中に
 巨人のみ獨り自己の姿を運ぶのだ
 彼のみ獨り輝くのだ
 地上楽しく生きて行くのだ (日本近代名詩集)

一六 水郷の夏

中谷徳太郎

暖さが増して来るに随つて、水郷は一入趣を添へて来る。逝く春のうら悲しい光の中に花が散りはてると、五月の生き生きとした日が照り、海からは新しい南風が水郷の松の



河竹黙阿彌

梢に靜に吹く。新緑から青葉へ。やがて長い雨の日が終ると、蘇つたやうな紫紺色の空から、夏の銀の光が激しく注ぎかゝる。夕潮が高く岸を洗つて、路傍の草の葉を浸して流れる。開け放した家々の灯が掘割の水に映つて、さながらに「夜曲」の情趣を描く……。その初夏はとうとう来た。窓の障子を開けると、すぐ掘割に湛へた水が

棧取
水中に材木を
保存するため
高く積上げた
もの

あつて、棧取や筏の間に流れ寄つた藻の花が白く咲いてゐる。掘割を區切る土手には、潮風に吹かれて葉の短い形のいゝ松が並木のやうに生えてゐる。その松のさしかはした枝の間から、そこにもこゝにも小橋の影が幾つとなく見えてゐる。

獨居に飽きると、水郷の橋を幾つも渡つて、入江の邊に築いた長い防波堤の上に立つ。すく／＼と角ぐみかけてゐた枯蘆の芽はいつの間にか伸びて、その根にひた／＼と夕潮がめぐる。そこから西の方を見やると、箱根の連山が、市街の上の空に、煤煙の中に、勢よく起伏してゐるのが見える。紫の富士の姿はなほ一段上の空に浮上つてゐる。さうし

默阿彌 河竹氏、脚本
 作、明、治、二
 十六、八、年、歿、年、二
 廣重 一、號、は
 時、代、立、齋、江、戸、
 五、世、師、後、期、の、
 歿、年、(五、六、二、
 北齋 葛飾氏、名は
 爲、一、江、戸、時、
 代、後、の、浮、世、
 繪、師、嘉、永、二、
 年、(五、十、二、
 年、九、十、二、

て夕日がその背の邊に落ちかゝつて、西の空を眞赤にまぶしく染めてゐる。北には筑波が微に見え、東には水を越えて低く房總の山々が眠つてゐる。

このあたり一體の水郷を見渡して、私はいつも江戸の三人の藝術家を聯想する。默阿彌の情調と、廣重の色彩と、北齋の筆致と、この三つの情趣以外のものは、水郷のどこからも見出すことが出来ないであらうか。



(筆畝雲下松) りきしよ

葛飾北齋 筆



(筆齋北飾葛) 狩 干 潮

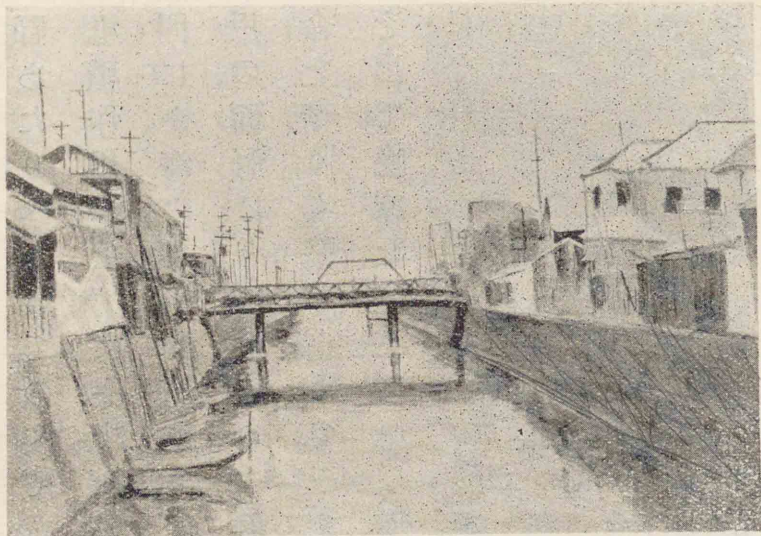
即ち 悲しいかな、それは過去の水郷の面影でなくてはならぬ。

水郷に來た春は東の間に過ぎて、四邊はいつか生きくとした初夏の世界となつた。蘆の葉ずれの中から、夏の暑さを呼ぶやうなやかましい行々子の聲が、もう耳許に聞えるやうな日が來た。海の方から磯の香の高い潮風が吹き、松の葉から月の雫のやうな冷たい露が落ちる。夜は圓やかな月が満潮の水に影を投げて、漕いで行く小舟のあとに銀砂のやう

葛飾野 東京市の東方
郊外一帯は葛
飾(東・北・南)
三郡で、古く
万葉集にも見
えてゐる歌の
名所である

に細かく碎ける。町で謠ふ子供の唄、橋に佇む人の團扇の影。夏の水郷ほど私の好きな處はない。しかし、晩涼とともに幾千万となく喊聲を揚げて襲つて来る蚊の群には、年々歳々なやまされ通す。名物の蚊は六月に入るともう出て来て、秋の半ば過ぎる頃まで、水郷の到る處に跋扈する。しかし、都會生活の膨脹が蚊を東京から追拂つてしまふ日を思ふと、夏の夜風になぶられる縞蚊帳の名残が惜しまれぬでもない。

西の郊外を武藏野と呼ぶならば、この東の郊外を葛飾野、または大川以東が下總に屬してゐた頃の名によつて總野と呼びたい。高臺と畑地と雑木林と、その間の乾いた赤土



水郷の街 (下山鉢那筆)

の途に砂塵を揚げながら馬車の通る武藏野の部分へは、入江の蘆荻洲と松と水田と、運河の上を舟の行くこの水郷を編入することは出来ない。昔、深川が殆ど潮入の沼澤であつた頃、東京灣が深く日比谷から上野へかけて彎入してゐた頃の江戸の土地は、ちやうどこの水郷から葛飾

野あたりへかけての姿であつたに相違ない。大川の運搬
 堆積作用が次第に海渚を埋めて平野を作り、江戸はいつの
 間にか海の方へ擴がつて行つた。さうした開府當時の江
 戸の面影は、今は水郷の一角に推し遷されて、幾何もない餘
 命を辛くも繋ぎ止めてゐる。水郷の夏が來た。私は書齋
 を出て晚涼を追ひながら、残る昔の懐かしい香に浸りたさ
 に、今日もまた一人水の邊をさまよふ。(水郷日記)

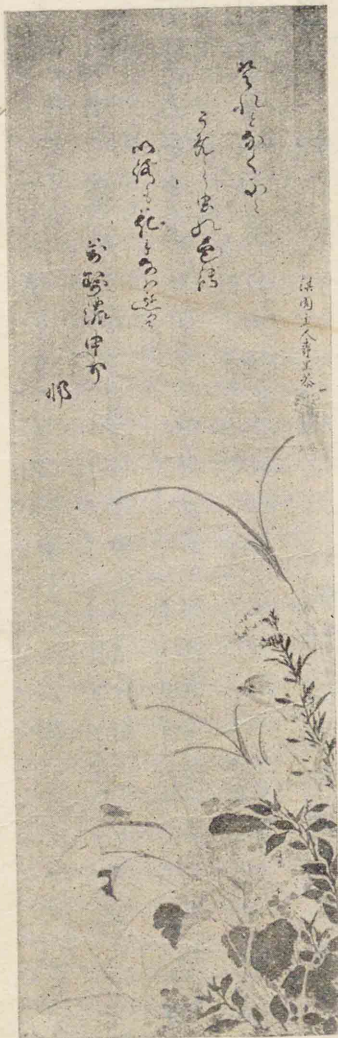
一七 感話三則

柳澤 洪園

或人文盲なるものを異見して、世の交は他のことはいら

柳澤洪園
 名は里茶、
 和國の人、
 江戸時代後期
 學者、實暦八
 年(一八四八)
 年五十八

それとなくき
 いそめし虫の
 聲のいろも花
 になりゆくま
 せの中かな
 洪園主人
 柳里恭



柳澤洪園筆蹟

ず。たゞ堪忍の二字をよく守るべし。といへば、文盲の人は
 頭を傾け、かんにんとは四字にて侍らずや。と指をもて數へ、
 「御許にはおぼしたるがへなるべし。かんにんと四字にて侍
 り。」といへば、異見せし人いふ、愚昧の人かな。堪忍とはたへ
 しのぶと訓みて二字なり。といへば、また頭を傾け、たへしの
 ぶならば、また一字殖えたり。五字となり侍るべし。何と

男
男
男し海へ

仰ありとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり。といへるに、その人またいふ、汝が如き愚昧の文盲は實に論しがたし。人に似て虫同様なり。おのれがまゝにすべし。と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても少しも腹立ち侍らざるなり。とて、笑ひるきとぞ。

二 人に長たる人

紀州に豪富なる農家あり。田植の日、早乙女およそ二百五十人あまりも出づるに、その日の朝、田植はじまる頃、近き山中にて、大いなる鷲の犬と争ひけるが、遂に犬をつかみて虚空へ飛上りたるを、他より一人駈來りて、田植の長にいひ

熊谷次郎
名は直實
初仕
めは朝實
後佛門
たへて功
入つた
と稱した

けるは、あれを見られよ、鷲の犬をとりて空に舞ひ侍り。といへば、その長詞を止めて、さることいふべからず。今は苗の植始なり。衆人このことを知らば、皆大空を仰ぎ見るべし。さある時は、この苗二百五十束ほどのおこたりなり。とて、人には語らざりきとなん。何事にて物物の長たる人々、かゝる心掛はありたきことにこそあれ。

三 善心坊と法心坊

熊谷次郎入道して關東へ下向せる折から、たゞ一人近江路より美濃へ越ゆる山中にて、盜賊二人前後を支へて、路銀衣服を渡すべし。とて、兩人刀を抜きつれ、逼りければ、入道笑ひながら、いと易きことなり。其方等も命をかけて賊を業

蓮生坊 寺

生 寺

とするは、身過のためと思はれたり。路銀・衣服ともに遣はすべし。さあれど、こゝに尋ねることあり、聞きたる上にてともかくもすべし。」といふに、賊もその詞のはげしきに猶豫して、いかなることを尋ねるぞ。疾くいへ、聞かん。」といふまゝに、入道の申さるゝは、汝等はたゞ慾のみに賊をなすか、また身を立つる所なくして、すぎはひの成りがたくて賊とはなりしか。この二つの返答を聞かまほし。その上にて、取らすとも取らせぬとも、わが心に任せん。」とあれば、賊等



(筆齋容池菊) 耶次谷熊

は互に顔見合せつゝ、飲食だに自由ならば、争でか人を害し人の物を奪ふべき。任せぬよりして、命に易へてかゝる業をもするなり。」といふに、さあらば、今より我が徒弟となりて、世を長閑かに暮らし、生涯無事に過すの志はなきか。もし二人ともその志あらば、今より直ちに伴ひて、法を傳へて、一庵の留守居ともなして得さすべし。よくよく思案して従ふべし。」とて、持ちたる路資を取出し、二人に分與ふれば、賊また顔と顔とを見合せ、土に手をつきて、さもなし賜はらば、今日よりして頓に志を改め、御弟子となりて、是までの罪障を滅し侍りたし。」とて、黄金をば手にだに觸れずして、頭を下げてるたりしが、入道は大いに悦び、懷より剃刀取出て、二人の

然

現代國語讀本 卷三



修位 法印、法師、法師、
僧官 僧正、僧都、律師、法師

矣

蓮生寺
武藏野

八月
西曆千八百十
五年

船

盜賊が警を糶捨て、法師となして、武藏野なる草庵に伴ひ連
れ、一人を善心坊と呼び、一人を法心坊と名づけ、ともに念佛
の弘通をなして、めでたき往生を遂げたりとぞ。入道徒弟
十餘人の中、この二人そのはじめなりきとかや。(雲萍雜志)

一八 いざさらば母國よ

それは八月半ば頃だつた。藍色の浪が軽く柔に膨れ上
つては、また平に伸して行く静かな夏の海を、英國の軍艦ノ
ルサムバーランド號は、悉く張つた帆に豊かな風を孕ませ
ながら駛るのだつた。掃き清められた艦の甲板には、帆綱
の影が黒く映つてゐるばかりで、一人の水兵も出てゐるな

つた。

大きな帆柱の蔭から、こつくと靴の音がして、一人の人
が出て來た。少し離れて、四人の人が俯きがちに歩いて來
た。いづれも黙つて、甲板に立止まつた。一番前ゐる人

ラホーグ
イギリス海峽
岬に突出した



ンオレボナの中船ふ向へナレヘトシセ

は、やがて静に右の手
で帽子を取つた。左
の手はそつと後方へ
廻して、腰の上に當て
た。青い山の影がは
つきりと見えた。佛
國のラホーグ岬であ
る。

る。

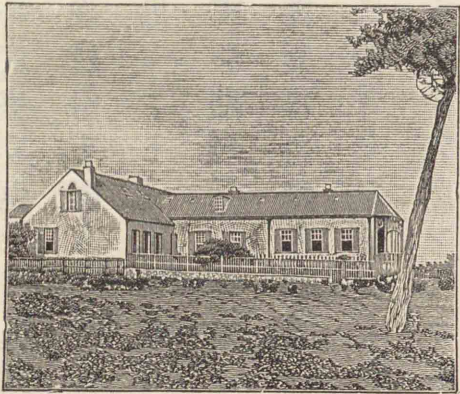
帽子を脱いだ人の顔は蒼白
かつた。廣い額の中ほどには、
半月形の髪が垂れ下つてゐた。
緑色の上着は胸の中央から左
右に分れて、二列に並んだ胸ボ
タンは、運命の星のやうに輝い
てゐた。奥深く窪んだ碧色の
眼は、何物にか魅せられたやう
に怪しく光つた。腰に廻して
ゐた手を劍の欄に掛けて、後の



戦激の - ロルテ - ヲ

矣

ワ
ー
テ
ル
ロ
ベルギーの
村、ブリュッ
セルの南十一
哩、西暦千一
百八十五年六
月八日、ナポ
レオンが英將
エリントンと
戦つて敗れた
處、ナポレオ
ンがフランスに
生れた、佛國
の大統領とな
つた(1769-1821)



家の馬終ンオレボナ

四人を振返つた。四人は一樣に恭しく頭を下げた。甲板の上へはらくと涙が墮ちた。振返つた人は言葉なくまた前方に見入つた。大きな白い翼を張つた海鳥が二三羽、さわくと音を立てて、舷を掠めて飛んだ。この塑像のやうに突つ立つてゐる人こそは、纔か二月前に、十數万の大軍を率ゐて、ワ―テルローの野に大激戦を演じた皇帝ナポレオンその人である。最後の激戦に打負けて、一たびはパリの都に還つたけれども、西に傾く落日は到底招き返されない。「今

一八 いざさらば母國よ

やうに、
いざさらば母國よ
と叫ぶ人こそは、
纔か二月前に、
十數万の大軍を
率ゐて、ワ―テ
ルローの野に大
激戦を演じた
皇帝ナポレオン
その人である。

矣

弟
ルイ、ボナパ
ルト、ヘレナ
南大西洋中の
孤島アフリ
カ島の西岸を
距る一四五〇
哩、面積四七
方哩

一度盛り返しては、と、膝に絶つて勧めた弟の願をも退けて、遂に身を囚人のやうに英艦に任せ、今しも大西洋中の一孤島セントヘレナへ流されて行くのである。歐洲の天地を震ひ動かした英雄も、數十万の精兵を己が手足のやうに指揮した皇帝も、敵國に囚はれては憫むべき一個の囚人たるに過ぎなかつた。かうして敵艦の甲板に立つて、次第に消え行くフランスの岸をひたとばかりに眺め入る時も、あゝ、その身邊を守る臣下としては、たゞこの四人だけである。潮の香を含んだ夏の風は、翼を張つたやうな帆を、また帆綱をはたくと鳴らした。あたりはいつの間にか陰つて來た。離れ行くフランスの岸は、山は、青い影は、やがて浪の

二學期

勝海舟
名は安芳、通稱は麟太郎、安房守といふ、幕末の政治家、伯耆、三十七年、西郷、年七十七、名は隆盛、通稱は吉之助、號は南洲、鹿兒島の南、明末の功臣、五十年、年五十一、歿

上に曳く一筋の糸となつて、遠く幽に消えようとした。五人は瞬もせず眺め入つた。海の上は蒼く陰つていつた。廣い海と廣い空とは、その中間に一筋の糸となつて、消え残つたフランスの最後の影を、永久にナポレオンの眼から奪ひ去つた。

「愛する母國よ、いざさらば！」

主従五人は默然として甲板を降りた。(悲絶壯絶英雄の最後)

一九 西郷の度量

勝海舟

自分が始めて西郷に會つたのは、兵庫開港延期の談判委員を仰付けられた時で、場所は大阪の旅宿であつた。其の

坂本龍馬、幕末の勤王、三〇三年三月に歿す

紹介状

時西郷は御留守居役格であつた。轡の紋の付いた黒縮緬の羽織を着て、なかく立派な風采であつた。坂本龍馬が来て、先生が屢々西郷の人物を賞せられるので、拙者も會つて見たいから添書を書いてくれ。と言つた。

早速書いてやつたが、其の後歸つて来て言ふには、成程西郷といふ男は分らぬ男だ。小さく叩けば小さく響き、大きく叩けば大きく響く。若し馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら



西郷隆盛銅像

大きな利口だらう。と言つたが、坂本もなかく鑑識のある男である。

西郷の偉い所は大膽識と大誠意とにある。自分の一言



を信じて、たつた一人で江戸城へ乗込んで来た。自分も事を處するには多少の權謀を用ひないで舟もないが、唯此の西郷の至誠に對しては、それを用ひることが出来る。此の時に際して、小籌淺略を事とするのは、却つて此の人に賜を見透されるばかりだと思つて、自分も至誠を以て之に應じたから、江戸城の受渡しも、あの通り立談の

間に濟んだのである。

西郷は坂本の評した通り實に漠然たる男であつた。幕府が倒れて、新政がまだ布かれず、丁度無政府の姿になつて



坂本龍馬

ゐた所へ官軍が乗込んで來たのだから、江戸市中の取締が甚だ面倒になつて來た。然るに、大量な西郷は、意外にも、實に意外にも、此の難局を自分の肩に投掛けて、後

は勝さんがどうかなさるだらう。」と言つて、江戸を去つて了つた。此の漠然たる「だらう」には自分も實に閉口した。此が普通の男なら、これはかう、あれはあゝ。」と、それ／＼談判し

品川
江戸四宿の
一、東海道口
田町
芝にある

て置くだらうに、^{それにしては}さりとては餘り漠然ではないか。併し、考へて見ると、西郷の天分の極めて高い所以は此處にある。西郷はどうも人に分らない所があつた。小さい人物ならどんなにしたつてすぐ腹の底まで見えて了ふが、大きい人物になるとさうでない。

西郷の大度・洪量に就いて、維新當時の模様を今少し細かに話さう。官軍が品川まで押寄せて來て、今にも江戸城へ攻入らうといふ際に、西郷は、自分が出した僅か一本の手紙で、田町の薩摩屋敷までのそ／＼と談判に遣つて來た。なかなか今の人では出來ないことである。

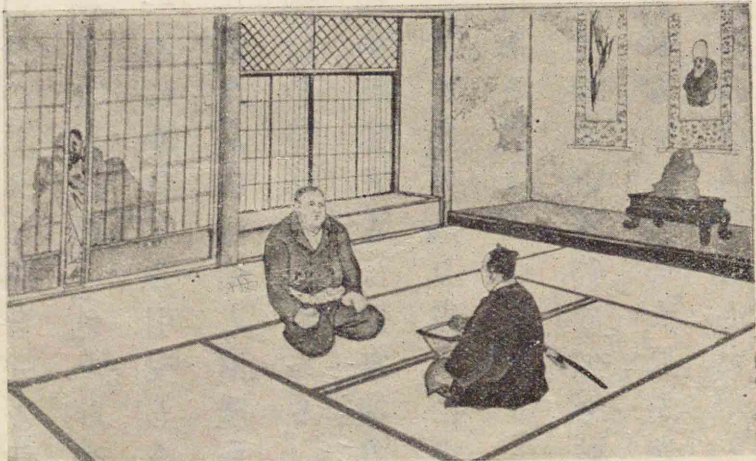
あの時の談判は實に骨であつた。官軍に西郷がゐなけ

板橋 江戸四宿の
伊地知仙道
名は正治・維
新の功臣、伯
爵、明治十九
九年歿、年五十九

れば、話はとても纏らなかつたらう。其の時分の形勢といへば、品川からは西郷などが来る、板橋甲州街道からは伊地知イヂチなどが来る。江戸の市中では、今にも官軍が乗込むだらうと大騒をしてゐた。併し、自分は外の官軍には頓着とんちやくせず、唯西郷一人を眼中に置いた。そこで、今話した通り、極短い手紙を一通遣つて、雙方何處かで出會つた上で談判したい。との旨を申し送り、其の場所は田町の薩摩の別邸がよからう。と、此方から選定してやつた。すると、官軍からも早速承知したと返事をよこして、いよいよ薩摩屋敷で談判を開くことになつた。

當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、従者を一人連れたばかり

りて薩摩屋敷へ出掛けた。先づ一室に案内されて暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引切下駄ひきぎりげだを穿はいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来て、これは實に遅刻しまして失禮。と挨拶しながら座敷に通つた。其の様子は少しも一大事を前に控へて居るものとは思はれなかつた。



海舟・南洲會見の光景

さて愈談判になると、西郷は自分の言ふことを一々信用してくれ、其の間一點の疑念も挟まなかつた。「色々むづかしい議論もありませうが、私が一身にかけてお引受します。西郷の此の一言で、江戸百万の生靈人民は其の生命と財産を保つことが出来、又徳川氏は其の滅亡を免れたのである。若し此が他人であつたら、いや、貴様の言ふことは自家撞着だ。」とか、「言行不一致だ。」とか、「澤山の兇徒があゝの通り處々に屯集して居るのに、恭順せんんの實は何處にあるか。」とか、いろいろと喧しく責立てたに違ない。万ん一さうなると談判は忽ち破裂だ。一併し、西郷はそんな野暮んぼは言はない。其の大局を達観して而も果斷に富んでゐたのには自分も感心した。

の反對
粹(天)地
意(意)氣(意)

殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣であるだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終坐を正して、手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光を以て敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見えなかつたことである。
其の膽量たんりやうの大きいことは所謂天空海潤てんくうかいじゆんで、見識けんしきぶるなどといふことはもとより少しもなかつた。人見寧といふ男が、若い時分に自分の處にやつて來て、西郷に會ひたいから紹介状を書いてくれ。」と言つたことがあつた。所が、段々様子を聞いて見ると、どうも西郷を刺しに行



桐野利秋

桐野
名は利秋、鹿
兒島の志士、
明治十年歿、
年四十

くらしい。そこで、自分は人見の望み通り紹介状を書いて
やつたが、其の中に、「此の男は足下を刺す筈だが、兎に角會つ
てやつてくれ。」と認めて置いた。それから人見はぢきに薩
州へ下つて、先づ桐野に面會した。桐野も流石に眼がある。
人見を見ると、其の舉動が如何にも尋常でないから、私かに
西郷への紹介状を開封して見たら、果して今の始末だ。流
石に不敵の桐野も之には少しく驚いて、直様委細を西郷に
通知してやつた。所が、西郷は一向平氣なもので、勝からの
紹介なら會つて見よう。」といふことである。そこで、人見は
翌日西郷の屋敷を訪ねて行つて、天下の大勢に關するお話を
承りに参りました。」と言ふと、西郷は丁度玄關に横臥して

ゐたが、其の聲を聞くと悠々と起直つて、「私が吉之助だが、私
は天下の大勢などといふむづかしいことは知らない。ま
あお聞きなさい、先日私は大隅の方へ旅行した。其の途中
で、腹がへつてたまらぬから、十六文で芋を買つて喰つたも
のだが、たかが十六文で腹を養ふやうな吉之助に、天下の形
勢などが分る筈がないではないか。」言つて、大口を開けて
笑つた。所が、血氣けつぎの人見も此の出し抜けの話に氣を吞ま
れて、殺すどころの段まがでなく、挨拶あいさつもろくく得せずえとに歸つ
て來て、「西郷さんは實に豪傑だ。」と感服して話したことがあ
つた。知識の點に於ては、外國の事情などは却つて自分が
話して聞かせたぐらゐるだが、其の氣膽の大きいことは此の

正道至誠

通り實に絶倫なものであつた。すばぬけなもの (氷川清話)

二〇 南洲遺訓

西郷隆盛

事大小となく正道を踐み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ちがひふる時に臨み、策略を用ひて一旦其の差支を通せば、後は事宜次第工夫の出来るやうに思へども、屹度策略の煩生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なるやうなれども、先に行けば成功は早きものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を 盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。己を愛す

愛人則天 練身

盡人事、俟天命、應長谷場君需、南洲書

凡人多倖て成る

西郷隆盛筆蹟

るは善からぬことの第一なり。修業の

来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するが爲なれば、決して己を愛せぬものなり。

過を改むるに、過てりと思ひ付かばそれにてよし。其の事をば棄てて顧みず、直ちに一步踏出すべし。過を口惜しく思ひ、取繕はんとて心配するは、茶碗を割り、其のかけを集めて合せ見ると同じく、詮なきことなり。

命もいららず、名もいららず、官位もいらぬ、人は始末に困る人

改過

正道

至誠

なり。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

正道を行ふ者は、天下舉つて

毀るとも足らずとせず、天下

舉つて譽むとも足れりとせず、

自ら信ずること篤きが故なり。

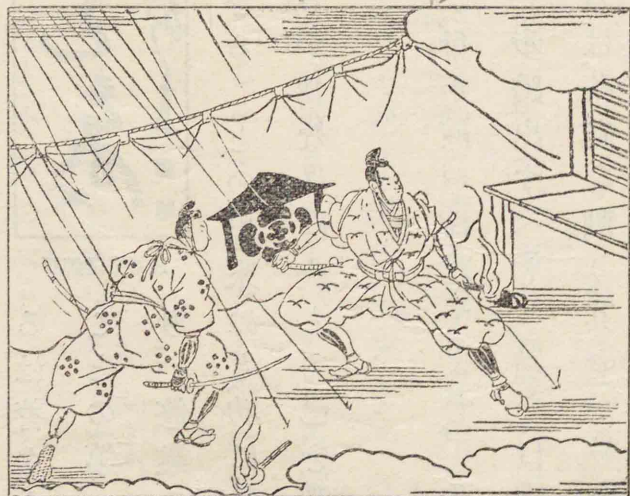
天下後世までも信仰悦服

せらるゝ者は、唯是一個の誠

なり。古より父の仇を討ち

し人、其の數舉げて數へ難き

なり。



曾我兄弟の夜討

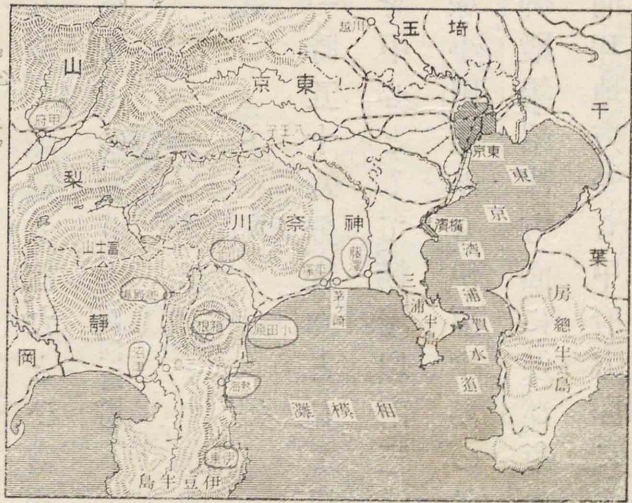
曾我兄弟
兄は十郎祐
成、弟は五郎
時致

中に、獨り曾我兄弟のみは、今に至るまで兒童・婦女子も知らざる者あらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠ならずして譽めらるゝは、僥倖の譽なり。誠篤くば、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。(南洲遺訓)

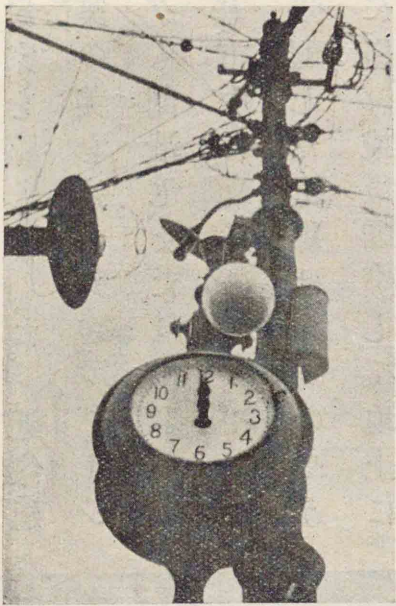
二一 關東大震火災記

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突如として起つた關東地方の大地震は、帝都を中心として、横濱以南三浦半島全部、相模灘の沿岸藤澤・平塚・小田原から、伊豆半島の熱海・伊東、それから北の箱根・山北・御殿場・沼津方面に及び、東は房總半島の西部沿岸地區、北は浦和地方から甲府方面に至

る廣大な區域に慘害を與へ、海嘯と劫火とがこれに伴ひ、忽ちにして無數の建築物を倒し、更に無數の人命を害ひ、又更に幾十百億の財寶を焼き、通信交通機關を壊滅に歸させた。蓋し有史以來の大天災で、どんなに巧妙な形容を以てしても、此の戦慄すべき悽愴な光景を髣髴させることは出来ぬ。帝國政治の中樞であり、東洋文化の中心である帝都は、地震と地震に因る火災とのため、忽ち一



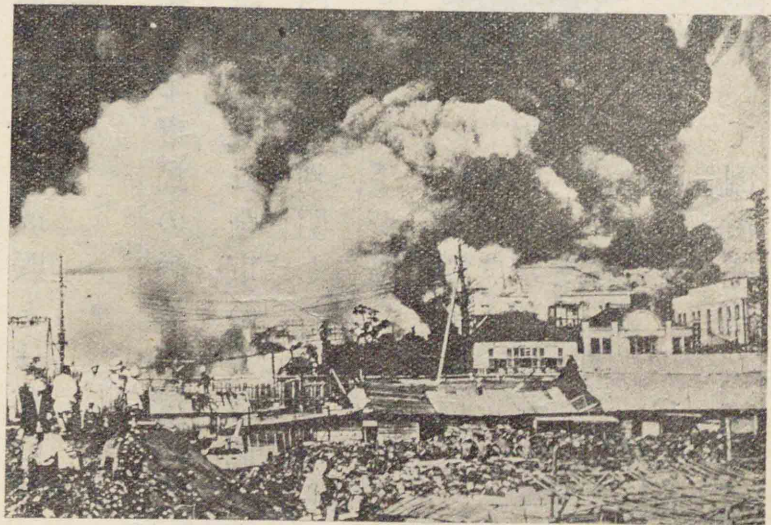
淺草凌雲閣
俗に十二階といふ



計時たつま止て分八十五時一十

望千里の焦土と化し、一瞬以前の繁華と殷賑とは夢のやうに消去つてしまつた。以上概略
突如激烈な大地の揺れを感じて、市民の悉くが驚愕と狼狽との間に街上に飛出した時には、既に全市の十數個所——其の後調査の結果百三十四個所と判明した。——から火の手が揚つてゐた。其の後激震は間斷なく打續いたが、初震に於て既に淺草凌雲閣の如きは八階以上が二つに折れて倒潰墜落し、十數戸の

民家を壓し潰した。近代建築の美を誇る大ビルディングも倒潰し、または龜裂を生じ、市中に蜘蛛の巣のやうに張廻した電線は亂麻のやうに纏れ、或は切斷して地上に落下し、水道の鐵管は隨所に破裂し、電車線路は蛇のやうにうねりを打つて壊れ、電信電話は凡べて不通となり、鐵道線路も大破して、帝都は全



面方座銀町樂有たれま包に火猛



階二十たし壊破

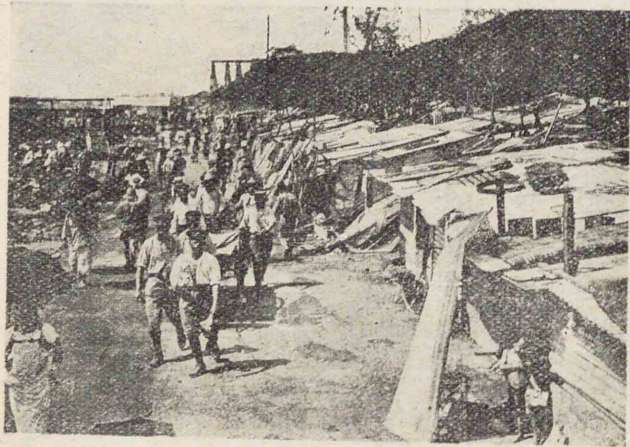
く孤立無援の状態となり、恐怖に戦く人々の叫喚、火に追はれ煙に咽びながら一條の遁路を發見しようとする大群集の騷擾は、さながらに見る焦熱地獄であつた。上野日比谷、芝の各公園、宮城前の廣場も、時の移るに随つて、僅かの家財を提げて命からがら避難しようとする多くの人々を以て満たされた。そ

紅蓮地獄かんたつ序の序

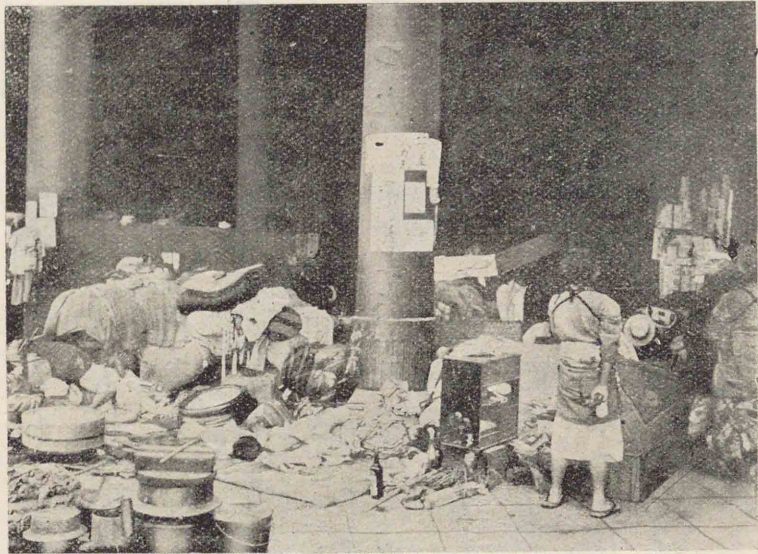
火事

して、太陽が漸く西に沈まうとする頃から、猛火は山の手方面を残して殆ど全市を押包み、黒煙天に押し、折柄の旋風に倍威力を加へて、紅蓮の焔は縦に毒舌を閃かした。其の区域の廣いのと斷水のためとで、近衛師團及び第一師團の軍隊も、警視廳の消防隊も、施すに術がなく、徒に奔命に疲れるばかりであつた。

かうして夜に入り、八方に迷惑ふ避難者の混亂は言語に絶し、凄じい爆音、大厦の焼崩れる響風の



日比谷公園の避難者クラブ



増上寺境内に運び込まれた罹災者の家具

唸り、火の唸り、誰一人として生きた心地もなく、血族が互に其の所在を失うて四散しながらも、なほ一條の活路を得ようとして走り、喘ぎ、倒れ、傷つき、溺れる間に、本郷・神田・淺草方面を甜め盡した猛火は、下谷・千住・本所・深川・日本橋・京橋・麴町・芝・赤坂方面に於ていよいよ暴威を逞しうし、火光

東京市震災焼失地域圖



輕井澤
長野縣北佐久
郡長野市
東南約二十里

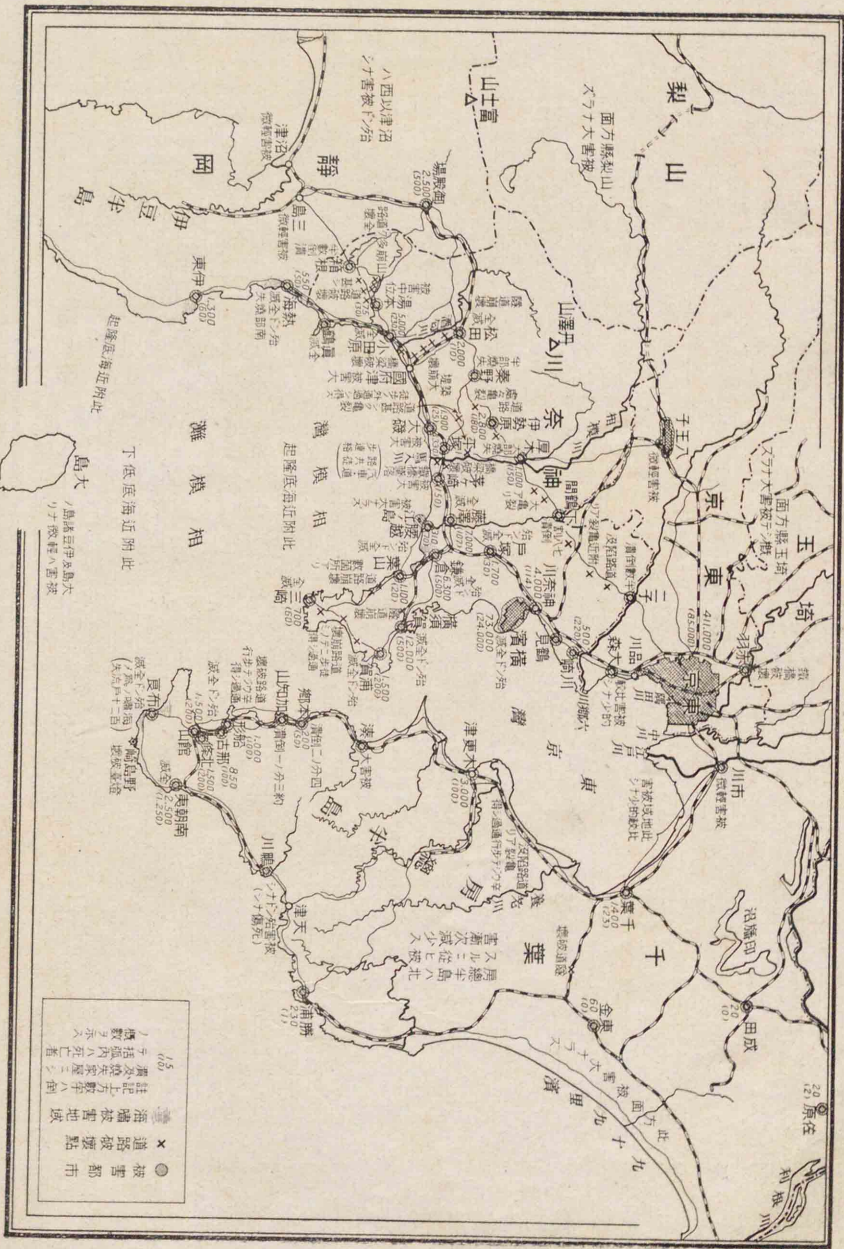
類焼

は遠く輕井澤方面からも望み得られたほどの強さとなつた。此の暴虐にはもはや人間の力では克てぬ、凡べてを自然の爲すがまゝに委せる外はなかつた。市民は大なる恐怖と、大なる騷擾と、死に面したやうな絶望との中に、一滴の水、一粒の糧をも得ることなしに、ひたすら夜の明けるのを待った。そして、二日の朝は來たけれども、高さ八哩、廣さ二十哩の天を掩ひ盡した濛々たる黒煙のために、太陽の光も見えず、火は益々各方面に延焼し、避難者の疲勞・困憊は極度に達し、流言蜚語は疾風のやうに幾百万人の耳から口に傳へられ、人心の不安と動搖とは刻一刻に其の度を増すばかりであつた。

むちやあゆれ

しづめられち

關東地震震害概況圖



相内田臨時首

名は康哉、熊
本縣の人、應
慶元年生、願
爵、樞密顧問
官、鹿兒島縣
山本伯
鹿兒島縣の
名は權兵衛、
鹿兒島縣の
生、嘉永五年
人、海軍大將

官報 號外 大正十二年九月二日
大正十二年九月二日
海軍大將正二位勳一等功一級伯爵
任内閣總理大臣
内閣總理大臣海軍大將正二位勳一等功一級伯爵
兼任外務大臣
從二位勳一等子爵
任内務大臣
後藤 新平
正五位勳二等
井上準之助
任大藏大臣
田中 義一
陸軍大將從三位勳一等功三級男爵
任陸軍大臣
田 健治郎
臺灣總督正三位勳一等男爵
任農商務大臣兼司法大臣
大 養 毅
正三位勳一等
任遞信大臣兼文部大臣
山之内 一 次
正四位勳二等
任鐵道大臣

山本内閣の任及辭令

官報 號外 大正十二年九月二日
大正十二年九月二日
海軍大將正二位勳一等功一級伯爵
任内閣總理大臣
内閣總理大臣海軍大將正二位勳一等功一級伯爵
兼任外務大臣
從二位勳一等子爵
任内務大臣
後藤 新平
正五位勳二等
井上準之助
任大藏大臣
田中 義一
陸軍大將從三位勳一等功三級男爵
任陸軍大臣
田 健治郎
臺灣總督正三位勳一等男爵
任農商務大臣兼司法大臣
大 養 毅
正三位勳一等
任遞信大臣兼文部大臣
山之内 一 次
正四位勳二等
任鐵道大臣

是に於て、内田臨時首相は、先づ非常徵發令・臨時震災事務
局設置・戒嚴令適用の三勅令を奏請公布し、戒嚴令を布いて
警備を嚴にし、次いで内閣組織の大命を拜してゐた山本伯

非常の時運備が足りて居ない
非常の時運備が足りて居ない
非常の時運備が足りて居ない

大震災非常の時運備が足りて居ない
大震災非常の時運備が足りて居ない
大震災非常の時運備が足りて居ない

は、急遽閣員の入選を終つて勅裁を仰ぎ、親任式は猛火の中
 で行はれた。實に前代未聞の出来事であつた。かうして
 四十万の家を焼き、百五十万の市民をして忽ち其の日から
 雨露を凌ぐに由なからしめた火災は、三日正午頃に至つて
 漸く鎮靜の状態となつた。(關東大震記)

自修文

二二 感謝

三宅周太郎

日暮里から避難者輸送の汽車が出ると聞いたのは、やつと三日
 の夕方であつた。

三宅周太郎、
 兵庫縣の人、
 明治二十五年、
 東京日日新聞、
 記者、
 日暮里、
 東京市外、上
 野公園の北、
 三日、
 大正十二年九
 月、
 得策、
 利益のある計

私はいろいろ考へた上、一刻も早く東京を離れるのが得策であ
 ると一人で主張した。東京で餓死するぐらゐなら、たとひ一里で



難澁

も二里でも東京を離れた田舎に行つ
 た方が、餓死の日を延ばせる筈だと思
 つたからである。そこへ五人の同志
 が出て來た。私はこの人々と共に、か
 んかんと日の照る四日の正午前に本
 郷を後にした。

途中の難澁は一寸筆に盡せぬ。で
 も、廻り廻つてやつと四日目の朝、私達
 は全く案外な元氣で無事に大阪に着
 くことが出來た。

私は何を措いても、日暮里から名古屋
 屋に至る鐵道沿線の人々に心から感
 謝の言葉を捧げたい。

先づ私はがつくり力も根も抜け果
 てて、貨物列車で鮪詰以上のひどい鮪
 詰になつて、東京から一時間ほど来た
 所の浦和驛に着いた。と、實に案外な
 ことには、そのプラットホームに
 は、ひやくとした清水が無数の桶に
 なみくと汲湛へられてあつたでは
 ないか。「水！」と思はず人々は鬨の聲
 を揚げた。その瞬間であつた、扉の隙
 間から水を求めてゐた私の掌に、ひや
 つとしたものが落ちた。いはずと知
 れた氷である。一杯の清水でさへ金
 錢以上に貴かつたその時、氷などは



者難避つ待を車列にム一オフトッラプ

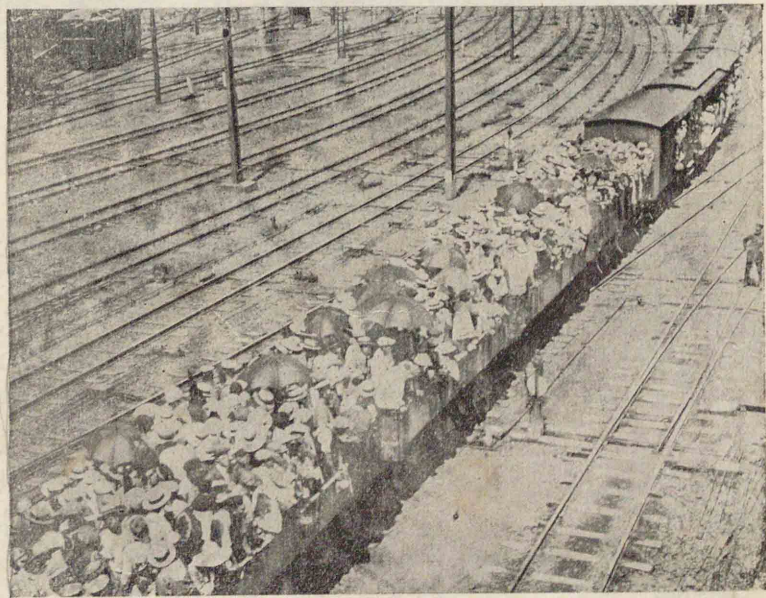


車列等三たし載満を者難避

全く私の想像以外のも
 のであつた。が、間違も
 なく氷が掌に載つてゐ
 たのである。
 外を見ると、霜降のズ
 ボンを甲斐々々しく股
 までまくり上げて、シャ
 ツ一枚に制帽を冠つた
 浦和中學校の生徒が、水
 や氷を、それこそ我々と
 同様の汗みどろになつ
 て、列車内の無数の避難
 者に配つてくれてゐた。

求めるものも、與へるものも
いづれも死物狂ひであつた
私は思はず目の裏が熱くな
つた。

やがて汽笛が鳴つた。私
が東京を出立した四日頃
は、我々はさうした救護が得
られやうなどとは、まるで思
ひも寄らなかつた。⁹²また沿
道の人々もまだ、避難者
をうまく扱ひ慣れてゐな
かつた筈である。それだのに
かうした行届いた深切振で



車列物貨たし載満を者難避

岡部
埼玉縣大里
郡熊谷町の
西北

あつた。人々はあまりに事が意外なので、與へられた氷や水にほ
つと息をついてしまつて、汽車が出發しても、ぼんやりとしてゐた。
私も嬉しさ餘つてくら／＼と倒れさうになつたが、思はず「有難う。」
と叫んだ。私の箱から續いて「有難う。」の聲が起つた。すると、そこ
からもこゝからも「有難う。」「有難う。」が叫ばれた。見ると、そこに立つ
てゐる若々しい中學生達
は、皆々青ざめた顔をして、
親しげに我々に目禮してくれた。私はまた思は
ず涙ぐんだ。汽車が驛を離れた頃、感じ易い心になつてゐる多く
の人々は、いづれも手拭で臉を拭いてゐた。
また、岡部では、馬鈴薯の蒸したのをくれた。無論そこへ來るま
でも、どの驛でも必ず何か食ひ物か飲み物かをくれて、深切にいた
はつてくれたが、腸を痛めてゐた私は、折角の握飯も食へず、水も飲

三宅周太郎

三宅周太郎自署

接待
としてなす

小諸
長野縣北佐久
郡千曲河畔

松本
松本市、長野
縣

めないのて、じつと飢と渴を忍んでゐたところへ馬鈴薯の御馳走
これなら私にも安心して食へる。
輕井澤の手前の松井田では、村の若い娘達が揃つて我々を接待
してくれた。誰でもかうした優しいもてなしを受けることは、東
京出立以來最初であつた。而も女性だけに、汽車が出る時、御無事
で、といつて揃つて送つてくれた。それが皆木綿の着物であるの
が一層我々に温かみを與へた。

小諸で、水と思つて小さな瓶を貰ふと、なまぬるい。一口飲むと
玄米茶であつた。私は實際有難かつた。こゝで始めて安心して、
先の馬鈴薯とこの玄米茶とて腹をこしらへた。

中央線に入つて、松本では扇子のない人に扇子をくれた。一分
の隙もなく詰められた人々は、この扇子でいかに涼を納れたこと
であらう。また「浴衣も上げますよ。」といつてゐる聲が聞えた。

木曾福島
長野縣西筑摩
郡木曾川の
東岸

上松
福島の次の驛
中津・大井
ともに岐阜縣
惠那郡

飽満
おなが一杯
になること

木曾福島ではパンをくれた。私はしみじみ有難かつた。そし
て、いつの間にか、どこでも水でなくて麥湯をくれるやうになつて
ゐた。段々設備が行届いたからであつたらう。

上松では、どうであらう、西瓜を振舞つてくれた。

中津では、更に恐れ入つたことには暖い味噌汁を振舞つてくれ
た。人々は武者ぶりついて、がぶ／＼と飲續けた。

大井では牛乳をくれた。

かうして我々は一文の金なしに、實に種々の「珍味」に快い飽満を
覚えながら名古屋に着いた。

この長い沿道の間、私は幾度となく窓外の人家を観察した。と
ころが、殆ど一樣に皆つまやかな農家が多かつた。それなのに、
その土地々々の人々は、三日以來、晝夜の別なく續々と汽車に乗つ
て來る避難者に、あゝした接待をしたのである。それも浦和その

他二三の地は、多少ながら同じく災害に會つてゐたのである。而も、我々に接待してくれた人々は、どこでも多くは本當につまやかな農民であつた。恐らく彼等は三膳の飯の一半を割いて、我々に御馳走してくれたのであらう。自分達は麥を食ひながらも、我我には米をくれた人もあつたであらう。これは必ずしも私の買ひかぶりではあるまい。なぜといつて、名古屋までの長い間の、それらの人々の接待の物腰恰好に溢れた一脈の温情は、私が生を享けて以來、最初に味つたといつても過言でないほど、質朴な中に籠る深い同情の現れとして、しみじみと私の胸を衝いたからである。

一脈
一寸

落合直文
仙臺市の人、
國文學者、
明治三十年
六月十三日

二三

近代の和歌

明治以後を云ふ

9.24

落合直文

長塚節
伊藤佐十夫

丁ラヤ歌

竹柏園歌

桂園歌

人の子よ母を
もつ子よ母を
らばたびにな
いでそ吾に悔
あり
直文

正岡子規
名は常規、
山市の人、
明治三十年
五月十六日

櫻見にあすは連れてこ契りおきて、

子はいねたるを雨降りいでぬ。 愛子の情

人の子よ母を
もつ子よ母を
らばたびにな
いでそ吾に悔
あり

落合直文筆蹟

子等は皆貝を拾ふと出でゆきて、

磯のはたごや晝しづかなり。 子か居るあゝ
静かなるあゝ
やわしきあゝ

一つもて君をいははん一つもて

親をいははんふたもごある松。 二井

正岡子規

櫻咲く御國しらすも、しきの

柑子

曙先生三
十年選會
のこの花のわく
そへてきみを取
たむけに歌たか
まつる
常規

與謝野鐵幹
名は寛、京都
市の生、明治
六年生、歌人、
慶應義塾大學
教授

現アキツカミ
御神

千代田の宮に神ながらいま。

曙先生 たちあのかく乃られをををて
三十一日 秋とまき

蹟筆規子岡正

潮はやき淡路の海せはみ

重なりあひて白帆行くなり。

もろこしの女神がつけし白玉の

かざしに似たる水仙の花。

與謝野鐵幹

光りつ、沖を行くなり如何ばかり

樂しき夢を載する白帆ぞ。

木下... もきそ... 水... 神... 入... 雲

蹟筆幹鐵野謝與

武藏野の森黒くなり夕焼の

にほふ空より秋の風ふく。

水のうへ鳳凰堂に残りたる

王朝の朱のほのかなるかな。

二四 停車場で

小泉 八雲

昨日、福岡から電報が来て、其處で捕へられた或重罪犯人
が、裁判の爲に、今日正午着の汽車で熊本に送られることを

小泉八雲
本名はラフカ
テイオガ、ハ
ン (Lafcadio
Hearn) 我
國に歸化し、
英國人、文
學者、東京帝
國大學講師、
明治三十七
年、五十七
年、五十七
年、五十七
年、五十七

木下... 河... 水... 神... 入... 雲

住居

女子英國人
カリーヤンヤ
全圖リ葉田

御愛濱河
五十第川

五... 七... 八...

橋... 東...

一、犯人にも良心あり
二、子供の力は偉大なり

犯人を悔恨させよ

知らせた。一人の警官が其の罪人護送の爲に福岡へ出張してゐたのである。
四年前の或夜、一人の強盗が相撲町の某家に入つて、家族を縛つて、澤山な貴重品を奪ひ去つたが、警官の爲に巧に追跡されて、其の贓品を賣捌く暇もなく、二十四時間内に捕へられた。併し、警察署へ送られる途中、鎖を切つて、警官の劔を奪ひ取り、其の人を殺して逃げた。先週までは、それ以上其の強盗に就いては何も分つてゐなかつた。
所が、熊本の探偵が偶、福岡監獄を見に行つて、其の囚徒の中に、彼の頭脳に四個年間寫眞を焼付けたやうになつて居る顔を見付け出した。看守に向つて、あれは誰です。」と尋ね

た。看守は、「此處では『草部』と記入されて居る竊盜犯です。」と答へた。探偵は囚人に近付いて言つた。「お前の名は草部ぢやない。野村貞一だ。お前は殺人の件で熊本へ御用だ。」



小泉八雲

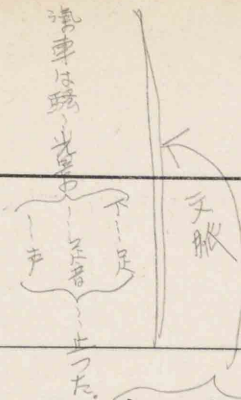
其の重罪犯人は悉く己の罪悪を白狀した。

私は停車場へ到着する重罪犯人を目撃する爲に、大勢の人々と一緒に其處へ行つた。私は此の犯人に對する群集の憤怒を見聞する覺悟をしてゐた。そして、犯人に對して群集の暴力が振はれねばよいかと恐れてゐた。殺された警官は非常に人望があつ

た。今其の遺族（遺族）や親戚は必ず此の群集の中に来て居るであらう。そして、熊本の群集は甚だ穩かであるとは言へない。また私は澤山の警官が警戒して居るであらうと思つた。併し、事實は私の豫想を裏切つた。

汽車は、忙しさと騒がしさとのいつもの光景、下駄を穿いて居る乗客の急ぎ足と、からころと鳴る足音、新聞やラムネを賣らうとする子供の呼聲の裡（裡）に止まつた。

私共は埒（埒）の外で殆ど五分間程待つてゐた。犯人は警官によつて改札口から押されて出て來た。頭（頭）を垂れて、繩で後手に縛られた、大きな粗野な男であつた。犯人も警官も共に改札口の前に止まつた。群集は前に押出して、併し、黙



つて之を見ようとした。其の時、警官は大聲で呼んだ、杉原さん、杉原おきびさん、來てゐますか。」

背中に子供を負うて私の傍に立つて居るほつそりした小さい女が、「はい。」と答へて人込の中を押分けて進んだ。此が殺された人の寡婦で、負うて居る子供は其の人の息子であつた。警官の手の相圖によつて群集は引下つて、犯人と警官との周圍に場所があげられた。其の場所で、子供を連れた女が殺人犯人と相面して立つた。其の静かさは死（死）の静かさであつた。

其の警官は、少しも其の女にはなく、唯子供に向つてだけ話した。低い聲であつたが、大層はつきりしてゐて、私は

其の一言一句をも聞洩らさないことが出来た。^{西洋流}「坊ちゃん、これが四年前にあなたのお父さんを殺した男です。あなたはまだ生れてゐなかつた。あなたはお母さんのお腹にゐました。今あなたを可愛がつてくれるお父さんのゐないのは、此の人の仕業によるのです。御覽なさい。」こゝで警官は犯人の顎に手をやつて、嚴かに其の眼を上げさせた。「能く御覽なさい、坊ちゃん。恐しがるには及ばない。厭でせうがあなたの務です。能く御覽なさい。」

子供は母親の肩越しに、すつかり開けた眼で恐れるやうに見詰めた。聴て啜泣を初めた、涙を流した。併し、畏縮しようとする顔を眞直にして、従順に犯人をじつと見て、見

て見抜いた。

群集の息は止まつたやうであつた。私は犯人の顔の歪むのを見た。そして、犯人が繩で縛られてゐながら、突然地上に倒れて、跪いて、其處に居る群集の心を震はせるやうに、悔恨の情の極まつたしやがれ聲で叫びながら、砂に顔を打付けるのを見た。「御免なさい、御免なさい、御免して下さい。坊ちゃん。そんなことをしたのは怨があつてしたのであります。ありません。逃げたさの餘り、恐しくて氣が狂つたからでした。大變悪う御座いました。何とも申譯のない悪いことを致しました。併し、私は私の罪のために死に行きま

す。死にたいのです、喜んで死にます。だから、坊ちゃん憐

んで下さい、堪忍して下さい。」

子供はやはり黙つて泣いてゐた。警官は震へて居る犯人を引起した。沈黙の群集はそれを通す爲に左右へ別れた。それから全く突然に全體の群集は啜泣を初めた。そして、日に焼けた其の警官が通る時、私は前に一度も見たことのないもの、滅多に人の見ないもの、恐らく再び見ることのないもの、即ち警官の涙を見た。(田部隆次譯)

二五 轡十文字

先輩の書大喜

菊池寛

約の如く、その翌日を初とし、四人は平河町の良澤の家に月五六回づつ相會した。

田部隆次 富山縣の人、明治八年生、英文學者、女子學務院教授
菊池寛 高松市の人、明治二十二年生、文學者
平河町 江戸麹町
良澤 前野氏

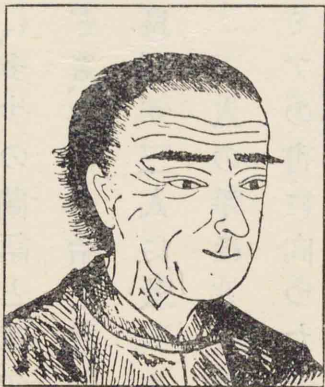
解剖新書

漢語

ターヘルアナトミア 解剖圖譜の義、蘭語キクルムスの著

良澤を除いた三人は、オランダ文字の二十五字さへも、最初は定かには覚えてゐなかつた。良澤は三人に蘭語の手ほどきをした。彼は遺に長崎に留學したことがあるだけに、多少の蘭語と章句語脈のことも少しは心得てゐたけれども、それも殆ど言ふに足りなかつた。一月ばかり経つと、良澤が三人に教へることはもう何も残つてゐなかつた。三人の手ほどきが濟むと、四人は始めて、ターヘルアナトミアの書に向つた。が、開卷第一頁から、たゞ茫洋として、艦舵のない船が、大洋に乗出したやうに、何處からも手の付けやうがなく、呆れに呆れて居る外はなかつた。が、二三枚めくつた所に、仰向けに伏した人體全象の圖があつた。彼等

は考へた。人體内景のことは知りたいたいが、表部外象のことは、その名所ナキコロも一々知つて居ることであるから、圖に於ける符號と説に於ける符號とを併せ考へることが一番取付



前野良澤

き易いことだと思つた。

彼等は、眉・口・唇・耳・腹・股・踵ヒソなどに附いて居る符號を文章の中に探した。そして、眉・口・唇などの言葉を一つ一つ覚えて行つた。が、さうした單語

勢勢

ほんたう

だけは分つても、前後の文句は彼等の乏しい力では一向に解し兼ねた。一句一章を春の長い一日考へ明かしても、彷彿として明らめられないことが屢あつた。四人が二日の

間考へ抜いてやつと解いたのは、眉とは目の上に生じたる毛なり。」と云ふ一句だつたりした。四人は、そのたわいもない文句に哄笑しながらも、めい／＼嬉し涙が眼の裡ウチニに浸ん

で來るのを感じないでは居られな

かつた。



杉田玄白

眉から目と下つて、鼻の所へ來た時に、四人は鼻とはフルヘッヘンド *Verhehrend* せしものなりと云ふ一句に突當つ

てしまつてゐた。無論、完全な辭書はなかつた。たゞ良澤が長崎から持歸つた小冊子に、フルヘッヘンドの譯註があつた。それは、木の枝を斷ちたる迹、その迹フルヘッヘンド

をなし、庭を掃除すれば、その塵聚りてフルヘッヘンドをなす。」と云ふ文句だつた。四人はその譯註を引合せても容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド！ フルヘッヘンド！」 四人は折々その言葉を口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へ抜いた。四人は目を見合せたまゝ、一語も交へずに考へ抜いた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。「解せ申した、解せ申した。方々、かやうで御座る。木の枝を斷り申したる迹、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、これも堆くなるで御座らう。されば、鼻は面中に在りて、堆起せるもので御座れば、フルヘッヘンドは堆し

玄白
杉田氏

と云ふことで御座らうぞ。」と云つた。四人は手を拍つて欣びあつた。玄白の眼には涙が光つた。彼の欣びは、連城の玉を獲たよりも勝つてゐた。が、Shinon神經などと云ふ言葉に至つては、ひと月考へ續けても解らなかつた。

彼等は、最初難解の言葉に接する毎に、丸に十文字を引いて印とした。それを轡十文字と呼んでゐた。初一年の間、どの頁にもどの頁にも轡十文字が無數に散在した。が、彼等の先驅者としての勇猛精進は、凡べてを征服しないではおかなかつた。一個月六七回の定日を、怠なく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈も明になり、そして、書中の轡十文字は殘少く搔消されて

和氏の壁
下和
趙
十五城

ゐた。

先驅者としての苦闘は、やがて先驅者だけが知る欣びで
酬いられてゐた。語句の末が明になるに従つて、次第に蔗
を噉ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が
彼等の心に浸付いてゐた。彼等は、邦人未到の學問の沃土
に、彼等だけ足を踏入れ得る欣びで、會集の期日毎に、兒女子
が祭見に行く心地で、夜の明けるのを待兼ねる程になつて
ゐた。(蘭學事始)

B
10, 12
讀
10, 15

二六 自修

嘉納治五郎

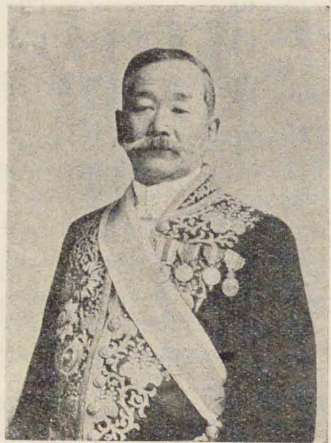
嘉納治五郎
兵庫縣の
萬延元年
前東京高
範學校長
族院議員
貴師

自修の必要なことは昔も今も同じである。「ローマ盛衰

〔羅馬〕
Roma

ギッボン
英國の歴史家
(1737—1794)

史の著者ギッボンは、修養に關して一の的確な教訓を遺し
て居る。それは、何人も二つの教育を要する。一つは他か
ら受けるもので、一つは自ら與へるものである。さうして、



嘉納治五郎

後者は前者よりも一層緊要である。といふのである。實に古
來學問の道に入つた者は、其の學問に就いて他人から教を受
けると同時に、己も亦砒々として、自ら修め、そして、其の到達點の最高最遠であることを期
したのであつた。蓋し他から注入されたものは我が有と
なることが割合に少いが、自ら修め自ら努力して得たもの

は自己の所有となり、真正に精神の榮養となるからである。
禪家の語に、門より入るものは是家珍にあらざ、須らく自己
の胸底より流出して、天を蓋ひ地を掩ふべし。とあるのは面
白い。

自修は印象を明確にし、知識を能力に變ずる最良の方法
である。これが卑近の例を擧げると、數學を學ぶに當つて、
毎日自分で練習せず、又豫め考量もせず、單に先生の説明ば

自修の効力

印象を明確にし
知識を能力に變ず

教育之事天下
莫如佛焉一人
人徳教廣加三
万人一世紀化
育遠及百世
甲南

教育之事天下莫如佛焉一人徳教廣加三
万人一世紀化育遠及百世

甲南

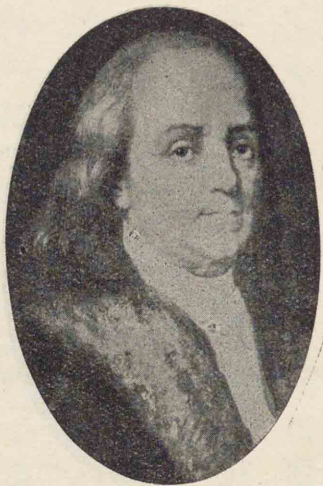
蹟筆耶五治納嘉

かりを聽いて居るとしたならば、其の結果はどうであらう。
其の説明を聽いた部分だけは分つたにしても、いざ應用問
題を解かうとする場合には、手も足も出ないであらう。外
國語を習ふに際しても亦同様である。自分で字書も引か
ず、又自分で文を作るなどのこともせず、單に教室内の講義
や指示ばかりに頼つて居るとしたならば、其の講義され指
示された事項だけは假に記憶することが出来るにしても、
教科書以外の書物を読みこなす力は養ひ難い。其の他、地
理・歴史・物理・博物、又は有らゆる専門學科の學習に於ても同
じことである。若し此等の學科の授業を受ける前と後と
に、自分で前後の連絡や因果の關係や事實の輕重などを考

へなければ、新に學得した知識は、既に得て居る知識と連鎖することが出来ないから、頭腦の裡に於て全く孤立し、記憶も鞏固カウチにならなければ、活用も自在にならない。斯ういふ譯であるから、經驗によつて自修の價值を知悉した者は、常に自修を以て殆ど己の生命のやうに考へて、たとひ寸陰でも之を徒費しないで、直ちに自修に宛てるのである。茲に自修とは、かの豫習復習の兩者を自己の全力を緊張して仕遂げることといふのである。隨つて自修が各學科を通じ必要なことは言ふまでもない。かの數學に解式書を用ひたり、語學に獨案内を用ひたりするなど、凡べて他に依頼するのは自修の本旨を没却するもので、自修の名はあつて

自修の功の家例

も効力は甚だ薄く、其の實は依頼心の變形といふべきものである。

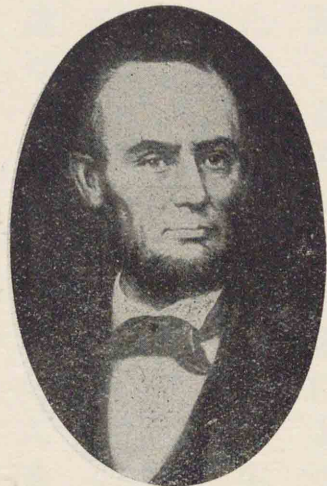


フランクリン

自修の效果は常に學校に於て授けられる學科の習得に對して補助となるばかりではなく、それが鞏固な意志によつて持續して行はれば、十分に學校に於ける學習の代用をもすることが出来るものである。かの米國獨立史上に不朽の名を留めて居るフランクリンFranklinの幼時の教育はどうであつたか。彼は僅々二年ほどの學校教育を受けたばかりである。又米國に於て殘忍暴戾な

フランクリン
米國の政治家・學者 (1706—1790)

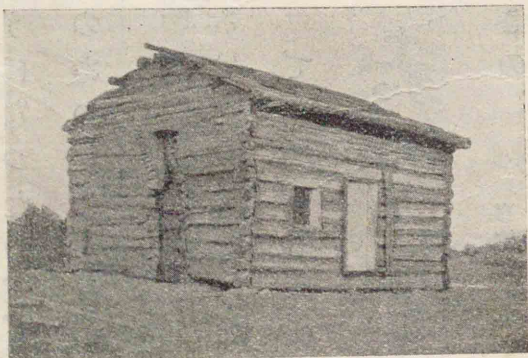
リンカーン
合衆國第十六
代の大統領
1809-1865
二宮尊徳
名は金次郎、
相模國の人、
江戸時代後期
の經濟家・學
者、安政三年
（一八五二）
七十
新井白石
名は君美、江
戸時代前期の
政治家・學者、
享保十年（一
七二六）
九



リンカーン

奴隸制度の廢止に盡力して、長へに人道の上に光を添へたリンカーンは、僅に一年足らずの外は學校教育を受けなかつたのである。又今日まで徳行の光の輝いて居る二宮尊徳や、碩學一世に秀でてゐた新井白石なども、殆ど他人から何等の教育も受けず、少壯時代に於て専ら自修の功を積んであのやうになつたのである。蘭學が始めて我が國に傳來した頃は、我が國の學者は始から一字々々字引を引いて見、想像に想像、熟考に熟考を重ねて、漸く大體の意味を察知したといふことである。更に手近

く余が實際に目撃した事實にもさういふことがある。先年、余の家に十七八歳の青年が來て寄寓することになつた。この青年の小さい頃には、まだ義務教育も十分に勵行されてゐなかつたので、僅に假名を讀み得るだけの學力しかなかつたが、余の家に寄寓してから、奮然として一通りの學力を得ようと心掛け、余が與へた假名付の書物で漢字を覚え、一心不亂に熟讀を重ねて、到頭相當多數の漢字を習得し、斯くて新聞紙などはすらくと讀み、日常の手紙



リンカーンの生家

の往復にも何等の差支を感じないやうになつたので、本人の満足は言ふに及ばず、余も世話甲斐のあつたことを甚だ喜んだのであつた。

自修の効力は此のやうに甚大であるけれども、又不利益が伴はないでもない。總じて自修だけで一通り學藝に熟達しようとするには、極めて多くの時間と勞力とを要し、而も見聞は自ら狹隘になることを免れないのである。この

嘉納治五郎

嘉納治五郎自署

點から言ふと、他人に就いて學ぶことは多くの利益がある。即ち僅少の時間に僅少の勞力で多くの事項を容易く習得することが出来るから、吾人は自修を怠らないと同時に、學

自修の要

竹越與三郎
號は三又、
湯縣の人、
應元年生、
族院議員、
貴慶新

校に於ける學習を輕視してはならぬ。

(青年修養訓)

二七 人の香

竹越與三郎

昨日、或席上にて一場の談話を求められ候ひし、人の香といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花たらんことを人々に求め候ひき。今茲に、少年諸君の爲に、更にこの趣旨を聞陳致したく候。

不開穠華、
不占紅、
飛晴野、
々、百花長恨、
風吹落、
楊柳獨愛、
三又漁叟

不開穠華、
不占紅、
飛晴野、
々、百花長恨、
風吹落、
楊柳獨愛、
三又漁叟

蹟筆 三與越竹

山野山に花卉花のこころ草木少からずご申せども、香芬におほいあるものは多か
 らず候。而も香芬あるものは藪澤くさくさの中にありごも人の
 爲に認めらるべく候。是ご同じく人も亦香氣ある者ご
 ならんごごこそ願ねがひはしく候へ。人の香氣ごは、其の才智
 藝能ぎのうに伴ふ所の崇高なる精神を申すにて候。苟も之あ
 らんか、其の事業の大小を問はず、必ず生命あり色彩あり
 て、人を動かし、人を感じしめ、人に認めらるべく候。あ
 さて、人の香氣は何より來るかご申し候に、自敬の念よ
 り來るごごを忘るべからず候。自敬ごは自ら尊大に構
 ふる譯にては之なく、自己が自己に對して敬意を表する
 ことに候。此の身惜みぢかしむべしご思ふ一念に候。眇ちとせたる此

君子は獨行
 云々
 宋史にある語
 君子は惡木
 云々
 管子にある語

アレクサン
 ドル大王
 マケドニア王
 ファイリッポスの
 子(前336-前323)



王大レドンサクレア

の身も天地の精靈を宿したる一塊なれば、大いに發しな
 ば、如何なる働を爲さんも知るべからず候。然るに、目前
 の劣等なる慾情に追はれて、尊たかからぬ所業を爲さんは恥
 かしき限りに候。君子は獨行
 影に恥ぢず。ご申すも、君子は惡
 木の枝に宿らず。ご申すも、皆同
 じ意義にて、己を敬ふ念より出
 でたる語に候。昔、アレクサン
 ドル大王に對して、敵軍に夜討をかけんご申出でたる者
 ありける時、大王之を却けて、朕は勝利を盗まず。ご申され
 候ひき。又、日野阿新丸が父の仇を討ちける時、先づ其の

濁しても
 盜氣の
 水



日野阿新丸 (野池齋筆)

枕を蹴て目を覺さしめて後之を撃ち候ひき。古今、戦勝の將軍、復仇の子少からざる中に、此等の人のみ多く語り傳へらるゝは何故なるかと言ふに、其の所業に精神あり香氣あるが爲に外ならず候。近來、我は如何にして富を作れるか。といふが如き俗惡なる成功談の傳へらるゝがため、少年を誤ること少からず候。小生は、少年諸君が唯其の才智・藝能によりて一時體裁よく暮らすといふやうな

可なる 機層

万を僥得するを儲ける 投機談に迷はず、精神あり

竹越與三郎自署

竹越與三郎自署

香氣ある生活を營まんことを希望致し候。香氣ある人は世間必ず之を認むべく、一時の不遇は決して失意落膽するに及ばず候。以上は平凡なる語に候へども、小生が平常家兒輩に語り居る所のものに候へば、無難にして間違なきことだけは確信致し居り候。小生は少年諸君が退いて右の香氣を養はれんことを偏に希望致し候。(讀書樓間話)

前田晁 山梨縣の人、明治十二年、生、文學者

二八 手紙の懐かしさ 前田 晁

手紙といふものほどあはれに懐かしいものはない。毎

一手紙を皮取つ時の場

日郵便配達夫の來る時刻になると、窓によつて、躍る胸を抑へながら、外面をじつと見てゐる人は澤山あるだらう。

獨りて淋しくてたまらずにゐるやうな時は勿論のこと、さうでない時でさへも、「郵便！」といふ高らかな配達夫の聲を玄關の方に當つて聞きでもすると、「幸福」が舞込みでもしたやうな嬉しい心持のするものである。「何處から來たのだらう。」「誰から來たのだらう。」「かういふ考が忽ち浮んで來て、その郵便物を手にするまでの楽しさといつたらない。いよく、それを手に取つて、封を切つて見る段になつて、最も嬉しく思はれるのは、やはり何といつても、親友の、蔽ひ隠しのない、胸を開いたやうな手紙である。暫く逢はなか

二親友から来た手紙

つた場合は勿論のこと、それほどでない時でさへも、心と心と相許した親友同志が、向ひ合つて心の中を語り合ふやうな手紙に接すると、俄に自分の胸も開けて來て、先刻までの淋しさなどは何時の間にか雲散霧消してしまふ。

遠く故郷を離れてゐる者にとつては、生家からの消息もまた懐かしいものの一つである。「この頃の氣候はどうも不順であるが、其許には別段の障りもないか。こちらは一家打揃つて無事に暮らしてゐる。天候が定まらぬので、作物の出來榮はどうかと思つてゐたが、先づ、この分ならば、この先天氣さへ續いたら豊年だらうと思ふ。その邊には何の懸念もなく、其許は専心に勉強するがよい。」かうい

三故郷から来た手紙

ふ手紙は大抵極まつた文句を並べることが多いものだが、それでも、それを書いた人が年老いた父親であるとか、優しい母親であるとか、または村の有力者として本當に忙しい長兄であるとかで、自分に親しい筆蹟を見ただけでも、様々なことが、故郷といふ觀念と共に聯想されて來て、他人の手紙などに比すると、幾倍の興味があるか知れない。

不斷ならばうるさく思ふやうな用事の手紙でさへも、時によると、また久しく待たれたもののやうに嬉しく讀まれることがある。例へば、思ひ疲れてたゞ茫然としてゐる時などは、さういふ手紙に接したために、自分の立場や周圍を改めて明に見やることが出來て、心の緊張を覺え、世間に處

四かたくるしう身
五結び

森鴉外
即契詩人

して行く上に於ける力と用意とを更に新にするやうなことがある。一體人の頭は時折何等かの刺戟を受けないと、どうかすると次第に腐つて行つて、終には因循になつたりこそくのかれ姑息になつたりしたがるものである。

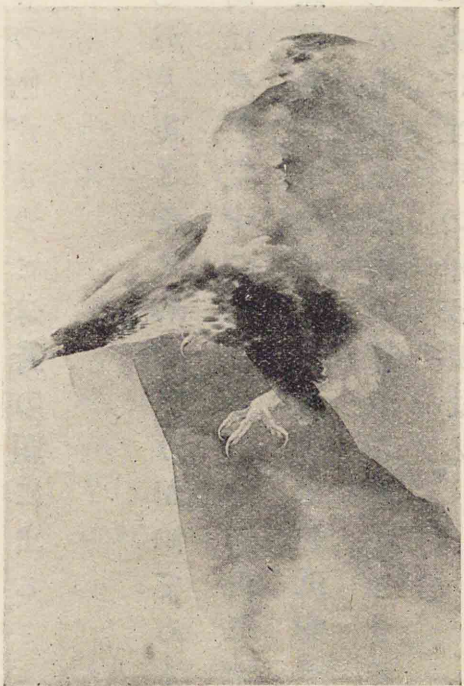
手紙を受取つた時のかういふ純な喜を思ふと、私もまたこちらからも胸を開いた真情の流露したやうな手紙を書いてやつて、人にも同じ喜を味はせたいと思ふ。

(大) (美) と (善)
二九 鷺の巢立

深山の巖角に荒鷺が巢をかけ、二羽の子鷺を育ててゐる。

母鷲が常に子鷲にいふ、——
 「強くなれ、強くなれ、諸鳥の大王、鷲の王子等！」
 子鷲は日にく強く育つ。
 鋭い眼、怒つた肩、尖つた嘴、曲つた爪。力が子鷲の全身に充ち満ちて見える。

今日ぞ目出たい巢立の日。
 空には一點の雲もなく、陽はさんくく輝いてゐる。
 山中の湖水は澄みきつて鏡の如く、逆しまに巨巖の影を浸してゐる。
 母鷲がいふ、——



(筆古半田棍) 鷲

「飛べよ王子等、
 飛んで汝の
 強さを示せ。」

一羽の子鷲は
 巖の頂に翼
 を休めて、じ

つと太陽を見詰めてゐる。——光線のあらん限りを

我が両眼に吸取らうとするかの如く。

一羽の子鷲は、やをら母鷲の傍を離れて、緩く大空に輪を畫き、静に下界を見おろしてゐたが、急に翼を縮め

て、まつしぐらに水面目がけて飛びおりた。
見よ、湖面に大魚が浮んでゐる。その背は覆つた小舟
のやうだ。

刃のやうな子鷺の爪が、むんずと大魚の背中を掴む。
喜の色がさつと母鷺の顔に出る。

しかし、鳥と魚と、兩者の力が似てゐるのであらう、
鳥は魚を空中に揚げるこゝが出来ず、
魚は鳥を水中に沈めるこゝが出来ず、
しかも爪を獲物の背から抜くこゝも出来ず、
此處に生死史死の争が始まる。

或り高し或り低し

一上一下、

水上の鳥と水中の魚とは必死の力で相闘ふ。
鏡のやうな水面に渦が巻き波が起る。

闘ひ疲れて兩者は暫く息をつぐ。

子鷺の兩翼は平たく水面を覆ふ。大きな蓮の浮葉に
も似てゐる。

と見る間に、子鷺は不意に水面に羽搏き「びい」と一聲裂
帛ガクのやうな叫を立てて、獲物を空に引揚げようと試
みる。

が、魚もさるもの、ひらりと跳ねて水に躍る。

子鷺の翼がぼきりと折れる。

子鷺はなほも残つた翼で二たび三たび水を撲つたが、
あゝ！

鳥も魚も遂に水面には見えなくなる。

魚は敵を負うて水中に入つたが、これもやがて水底の
藻屑と消えるであらう。

母鷺はほつと吐息をついて、巖の上の子鷺を顧みる。

巖の上には子鷺の姿は見えぬ。

頭を擧げて遙かの虚空を仰ぐ。

おう！ たゞ一小黒點が太陽理想へ向つて飛んで行つて

ある。

「さすがは我が子だ！」

母鷺の胸は高鳴つた。

「勝敗は物の數でない。力の限り根え限り不撓たがの勇氣を

揮ふところに、諸鳥の大王、鷺の王子の資格があるの

だ。

愉快！

二羽が二羽とも目出たい王子の巢立だ！」

自修文

三〇 渡邊華山

村松 梢 風

村松梢風
名は義一、
岡縣の人、
治二十二年
生、文章家

谷元晃り
弟子

虎之助
渡邊華山の幼
名

鳥目
錢

或日、虎之助は、永の病氣で煩つてゐる父のために、本町まで薬を買ひに行つた。「いわしや」といふ大きな薬種問屋へ行つて、頸に掛けて來た鬱金木綿のよごれた財布の中から、薬の名を書いた紙切と一緒に、ありたけのお鳥目を出して番頭に手渡すと、番頭は無雑作にそれを受取つて、帳場の錢箱の中へがちやんと投込み、それから無数の抽斗のついてゐる戸棚の、その一つの抽斗から薬を出して、袋ごと秤に掛けて、「はい、お待遠様。」といつて、虎之助に渡した。虎之助は薬の袋を小さな風呂敷に包み、大事さうに持つて、「いわしや」の門口を出た。

大通に出ると大層な人通りだつた。花見に行くのだと見えて、酒樽を持つたり、重詰を持つたりした連中が、揃ひの着物や揃ひの手拭で威勢よく歩いてゐる。さういふ人達を見て、虎之助はもう薬のことは忘れてしまつた。薬のことを忘れると同時に、父の病

大平記續



渡邊華山

氣のことや、我が家の貧しいことや、それから起るいろんな果敢ないやうな心持も消えてしまつて、今日の空のやうな晴れやかな氣持になつた。風がなくて暖かだ、なんともいへない好い日和だつた。虎之助は浮きくした氣持になつて、日本橋の方へ歩いて行つた。

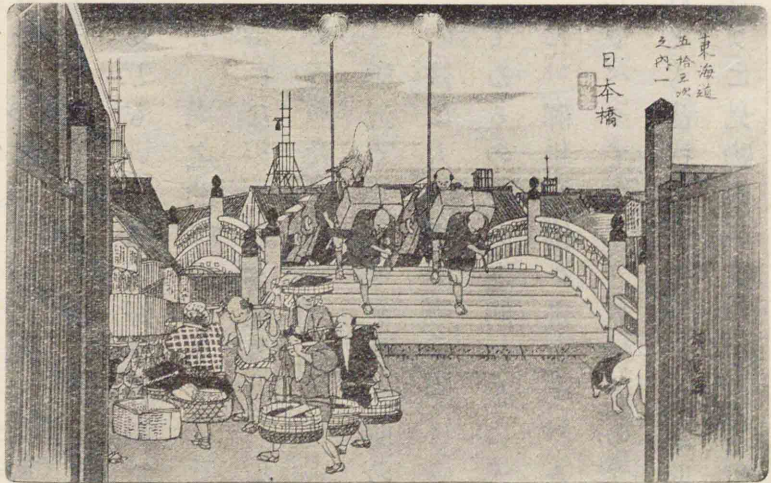
橋近くなつてから、向側の橋の袂に人が黒山のやうに立つてゐるのが、虎之助の眼に入つた。群集が輪を畫いてゐるその真中で、一人の男が何か高聲にしゃべつてゐる。見物人のどつと笑ふ聲が聞える。「辻講釋か、それとも齒抜きか知ら」と、虎之助は遠くから見てゐるが、あまり面白さうに見物人が笑つてゐるので、

自分も側へ行つて見にくくなった。彼は人通りの多い往來を斜に横切つて、そちらへ駈けだした。ところが、忽ちどんと人におつかつた。あまり勢よく走つて行つてぶつかつたので、虎之助はすてんとその場に倒れてしまつた。

「無禮者つ。」

と大喝一聲、頭上から浴びせかけられた。虎之助はやう／＼這起きて見ると、厳しい大名行列が橋を渡つて來る所で、自分が今突當つた相手はその前驅だつたので、

大喝
大聲でどなる



日本橋の大名行列 (歌川重筆)

「これは大變なことをした。」と思つた。

「無禮者めが。お供先を切るとは不届千万。これへ出え。」

「とんだ粗相を致しました。平にお許し下さりませ。」

「いや成らん。場所もあらうにかやうな大道でお行列を冒す

とは、定めて故意であらう。さあ、意趣を申せ。」

意趣
理由

「どう仕りまして、全くの粗相でござります。御慈悲を以てお

許し下さりませ。」

袴の股立を取つた四五人の武士が虎之助の廻りをぐるりと取巻いた。何處からともなく彌次馬がぞろ／＼やつて來て、またその廻りを取圍んだ。大名の乗物は橋の中頃で止まつてゐた。

「備前様のお行列だのに、あの小僧がお供先を切つたんだ。」

彌次馬ががや／＼とこんなことをいつてゐるので、虎之助は始めてその行列の主が備前の池田侯であることを知つたのだつたが、

とにかく落度は自分にあるので、あやまるより外に道はなかつた。
「此奴、乞食のやうなむさくるしい身なりでありながら、兩刀を
帯してゐるからには、武士と見える。こりや、やい、其方は何れの
家中だ。主人の名を申せ。」

「何卒その儀は御勘辨下さりませ。重々お詫び致します。」

「主人の名はいへぬのか。それとも宿なしの素浪人か。やい、
小僧、本来なら一刀兩斷に斬つて捨てるべき奴だが、今日は殿様
御佛參の途中ぢやによつて、命ばかりは助けて遣はす。向後氣
を付ける。」

といふや否や、一人の武士は足を舉げて、大地に手を突いて頭を下
げてゐる虎之助の肩のあたりを丁と蹴つた。虎之助は横ざまに
倒れた。續いて肩といはず背といはず散々に打ちのめされたり
蹴られたりした。武士達は腹存分虎之助を折檻した後、意氣揚々

向後
今から後

折檻
責めさいなむ

としてお供先を揃へて歩き出した。恰もさういふことをしたの
で、自分達の主君の威勢を庶民どもに知らせてやつたといふやう
な顔をして。

行列は徐々と通つた。虎之助は散々打擲されたので、すぐには
起ちも上れなかつた。彼は依然として地上に倒れたまゝ、行列を
送つてゐた。が、きらびやかな輿が側へ來たので、彼は少し頭を擧
げてその輿の中を見た。當年十二歳の備前岡山藩主池田内藏頭
は、輿の戸を明けさせて、往來の有様を楽しさうに眺めて行くのだ
つた。彼は輿の中から、頭髮から衣服まで泥にまみれて倒れてゐ
る自分と同じ年頃の哀れな少年の姿をも見たけれども、それは路
傍で名もない雜草が踏みにじられてゐるのを見た時以上には、な
んとも感じてゐないやうな顔をしてゐた。

虎之助は半藏門外の三州田原藩三宅家の邸内にある我が家に

長官

戻つて来た。家では、母のお繼が、薬買ひにやつた伴虎之助の歸りがいつになく遅いので案じてゐるところへ、虎之助は戻つて来るには来たけれども、見れば打萎れ、その上髪は亂れ、着物は泥まみれになつてゐるので、駭いて、「この兒の常にも似合はない。何處ぞで喧嘩をして来たものと見える。」とは思つたが、

「虎之助、まあ、そちの有様はなんぢや。」

と叱りつけた。虎之助は母の顔を見たので、今まで、恠へてゐた涙が一度に堰を切つたやうに迸り出て、そのまゝ、母の足許へ泣伏してしまつた。

根本からため息

「他所で悪戯をして大切な着物を臺無しにして来て、それで家へ戻つてまで泣く意氣地なしがあるか。なんといふ馬鹿な兒ぢや。」

「いえ、母様、さうではござりません。」

一部始終
一伍一什
事の始から終
まで

遮莫

莫大小

蹂躪
ふみにじる

といつて、さて虎之助は泣く／＼今日の「一伍一什」を母に物語つた。「自分はこの口惜しい思をすることは生れて始めてだ。自分は小祿ながらも武士の子として生れて来た。物心が附いてから、自分は何を一番最初に教へられたか。それは武士としての誇を失ふなといふことだつた。武士の誇——それを忘れたことはなかつた。ところが、今日はどうだつた。その大切な武士の誇を滅茶に蹂躪されてしまつたではないか。そればかりではない、あの大道の真中で、草や石ころと同じやうに土足で踏みにじられた自分の體には、生きてゐる人間としての値打さへ見られないではないか。なんといふ情ないことだらう。自分はその日の生活にも困る貧しい武士の子だ。先方は天下に重きをなす三十一万石の大々名だ。その身分には生れながらにして天地の相違がある。しかし、自分も池田侯も同じ人間だ。しかも同じぐらゐるの年頃だ。」

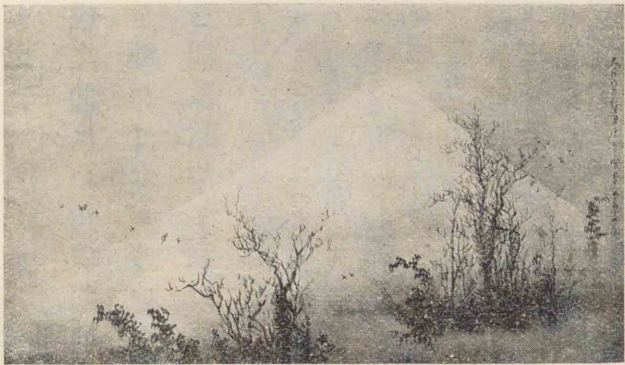
懸隔
へたり

手籠
手ひどいめ

うつけ者
うつかり者

それなのに、かうまでひどい懸隔があるのは何故だらう……。虎
之助はこんなことを考へながら泣入つた。
お繼は我が兒を不憫に思つた。可愛い我が兒が大勢の武士の
ために手籠にあつて打擲されてゐる有様を考へると、自分の肉身
を寸断されるやうな苦痛を感じた。落度があるとはいひながら、
年端も行かぬ子供を捉へて、餘りといへば酷い仕方だと、彼女は火
のやうな憤を感じた。しかし、相手が大名では何といつて見たと
ころで仕方がない。大名といふ大木に對しては、自分達は扇の風
ほどの力さへ持つてゐないのだ……。

「そちがうつけ者ぢやによつて、そのやうな目にも會ふのぢや。
これに懲りて、この後はたしなんだがよい。」
と、彼女は涙を浮べながら我が兒を叱つた。
「母様私に願がござります。」



波邊華山筆蹟

「なんぢや。」
「私は學問がならひたうござります。
どうか父様にお願ひして、明日から學
問の先生の所へ遣つていたゞきたう
存じます。」
「學問をしたいといやるのはよいが、
何でまたそちはそのやうに急に學問
がしたくなつたのぢや。」
「母様、私は今日途々考へました。私
は備前の殿様に負けたことが残念で
なりません。どうかして大人になつ
たら備前の殿様よりもずつと偉い人間になりたうござります。
それには是非とも學問をしなければなりません。學問をして

日本一の學者になつたら、備前の殿様に負けてゐなくてもよいだらうと存じます。母様、どうか父様にお願ひなされて下さりませ。」

と、虎之助はいつの間にもやら涙の跡も消えてしまつた眼に、希望の光を輝かせながらいつた。

お繼は黙つて我が兒の顔を見守つてゐた。が、その時、彼女の胸

お繼は我が兒の顔を
見守つてゐた。が、その時、
彼女の胸に、希望の光を輝かせながらいつた。

渡邊華山筆蹟

(貧窮餘りに)其敷、筆紙に盡候處には無之依之弟共は寺へ奉公に遣、又は出家爲させ、妹は御旗本へ奉公に遣し、其苦難の内、幼少之弟を私十四歳半(〇)時、板橋迄生別れに送り参り候時、雪はチラチラ降り來、弟は八九才にて見しらぬ男に連れられ、跡を振向くわかれ候事、于目前に見え候如く御座候、右弟は定意と申後に熊谷宿にて客死仕候、雷之助と申は始七才之時、青松寺と申寺へ奉公に遣し、後に御旗本屋敷へ養子(〇)遣候、これ其始食物(足らず、困窮の餘りに候へば、養子とは申しながら、丸裸にて、親知の様ににて：心外に存じ、終に京都に出奔仕候)

には強い喜びの情が込上げてゐた。お繼は我が兒の行末を頼もしく思はずにはゐられなかつた。

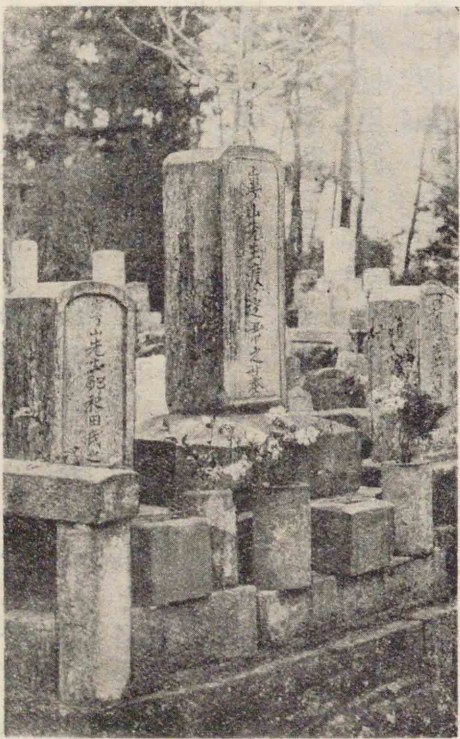
虎之助の親達は、これまでその子に學問を仕込むことを疎かに考へてゐた譯ではなかつた。が、貧しい生活には少しの餘裕もなかつた。その上、父の市郎兵衛は永の病で、大概床の上で暮らしてゐる有様だつたの

で、一家の者は食をつめてもそれでも

薬餌の代に追はれなければならなかつた。そんな風で

虎之助に學問を仕込むことも、今日ま

薬餌くすり



渡邊華山の墓

鷹見星臯 名は定允、田原侯の家老、文化八年二月二日歿、年六十
 没頭 その事に熱中する
 購ふ 買ふ
 拔擢 引きぬく
 登庸 あけ用ひる

では等閑たがひなくにして來たのだつた。併し、お繼は今日といふ今日は、どんな苦勞をしてもこの兒を立派な者に仕立てなければならぬと思つた。彼女はすぐさま病床の夫に向つてその事を相談した。市郎兵衛も無論賛成だつた。
 元來市郎兵衛は自分も學問が好きだつた。彼の家はもと／＼貧乏で餘財はなかつたが、學問をしたさに、十五の年に故郷田原から江戸へ出て、三宅家の儒臣鷹見星臯の門下生となつた。彼は日夜精勵刻苦して學業に没頭ぼつとうしたが、書籍を購ふあがな金がないので、四書五經から史記左傳などまで、凡べて他人の本を借りて來て謄寫ちやうしやしたのだつた。さうした苦學の効が現れて、彼の學業は大いに進んだので、若年で拔擢はつてきされて、主君對馬守康和の側用人そばうじんに登庸とうようされた。市郎兵衛は、名は定通、字は叔澤、巴洲はまたは半軒と號した。さういふ人となりであつたから、市郎兵衛は我が兒の健氣けんきな發奮を妻以

正木不如丘 名は俊二、長野縣の人、明治二十年生、應義塾大學醫學博士、院長、院内科部長

上に喜び、その翌日から、虎之助を自分の恩師である星臯の許へ入門させることにした。(本朝畫人傳)

三一 實驗動物の生命 正木不如丘

過去の四十年近くを回顧して氣味悪く思ふのは、自分の實驗上の必要からその生命を奪つた動物のことである。
 幼かつた頃、私は辛うじて捕へた蜻蛉の尻をちぎり、それに紙縊こよりをさして放したものだ。尻に紙片をつけた蜻蛉は、秋の空高く飛去つて見えなくなつた。こんな遊をした日の夜、床の中に入つた後、私はあの蜻蛉はどうしたらう、何處かの果で死んで了ふのだらうと思つて、何となく悲しくな

り、もうあんなことは止めようと思ひながら、次の日の學校
歸りには、また同じことを繰返した。その頃は紙片をつけ
た蜻蛉の飛去るのを見るのが何ともいへず面白かつたの
で、こんな酷いことをしたのであつた。

私は蛇が大嫌ひで、あのぬる／＼とした長い姿を見ると
氣味が悪くつて仕方がなかつた。夏の日の水泳の歸路な
どに蛇を見出した時には、大急ぎで逃げた。しかし、私は蛇
を憎んでゐるなかつた。たまく、他の子供達が蛇をなぶ
り殺しにするのを見て、氣味がいゝとは思へなかつた。
子供の頃、鼠取の籠の中に入つた鼠を見ると、大喜びで大
きな盥の中に水を充たし、鼠を籠のまゝそれに入れた。鼠

は水の中で狂ひ廻つた後、泡を吹いて動かなくなつた。し
かし、いゝ氣持はしなかつた。

大學を卒業して、その助手を勤めるやうになつてから、



正木不如丘

私は鼠やモルモットや兎などを
研究の資料として澤山使ひ、必要
に應じては平氣でこれを殺した。
頸動脈を切つて出血死をさせた
り、また急速に生命を奪ふ必要の

ある時には、兎の頭を金槌でなぐつたこともあつた。
研究のためには誰でも平氣でかういふことをしてゐた。
私もまたそれに慣れてかういふことをした。時には、私が

兎の頭部を金槌で狙つてゐるのを見た同僚が、「おい、化けて出るぞ。」といったこともあつたが、私は心の中で、學問のためだ、人類のためだと思つてゐた。實際その頃は自分の研究は學問の進歩發達に大きな影響があると信じてゐた。

その後、年月の過ぎるとともに、自分が一生がかりで研究しても、

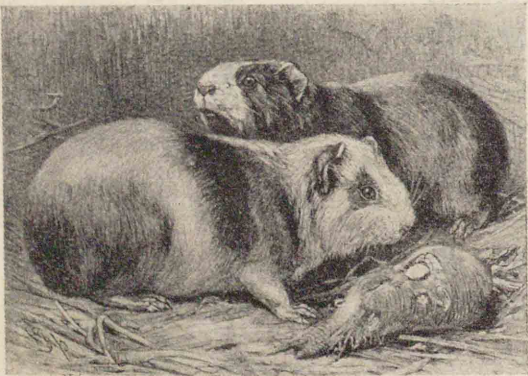
正木不如丘

正木不如丘自署

それはほんの小さな泡ほどしか學問のためにも人類のためにもならないことをしみぐと感ずるやうになつて來た。かう思ひつくと、實驗動物の生命がいとしくなつて來た。それでも、やはり己むなく同じことを續けてしてゐた。

パリに行つて、言葉も顔色も違ふ人の中に入つて研究するやうになつた時、私はまたもモルモットや兎の生命を奪はなくてはならない羽目たすはあなるに陥つた。日本にゐた時にはまだ平氣で此等の動物の生命を奪ふことが出來たが、パリでは思ひきつてそれが出來なかつた。しかし、とうとうどうしてもモルモットを殺さなくてはならない日が來た。私はモルモットを持つて研究室を出て小使室に行つた。

「おい、フランスでは動物をどう



ト ッ モ ル モ

して殺すのだ。」

小使は兩方の肩をそびやかした。

「殺してはいけません、犠牲にしなさい。」

かういつて、小使はモルモットの腹部を握つて、その頭を机の上に叩きつけた。

「それ、ドクトル。」

小使は死んだ動物を無雑作に机の上に投出して出て行つた。その日以來、私は論文に決して「撲殺」といふ字を用ひず、必ずこれを「犠牲にして検する」と書くやうになつた。

「撲殺」とは何といふ醜惡な字であらう。かういふ字を使ふ學者の心事を思ふと悲しくなる。私は近來、同じく動物

を使ふ研究でも、或時期になつて故意にこれを犠牲にしなくてはならないやうな研究はなるべく止めたくなつて來た。出来るならば試験管の中だけで済む實驗だけにしたいと思つてゐる。この意味に於て、動物の成長の状況を検査する實驗などは、現在の私には理想的の研究であらう。日本の學者は思ひきつたことをいふと思ふ。「撲殺」などといふ悲しむべき言葉を平氣で論文の中にも書いてゐる。フランスでは決して「殺す」といふ字さへ用ひぬ。大抵は「犠牲にする」といふ字を用ひる。心の動きの状況が日本の學者とフランスの學者とでかうも違ふかと思ふと淺ましくてならぬ。

上司小劍
名は延貴、
治七年生、
家説
小明奈

三二 朝顔と香魚

上 司 小 劍

百花のうちで、朝顔は私の最も好きなものの一つである。句の豊かでないのが却つてこの花にふさはしい。どこまでも清洒な趣を、その花瓣の上に見てゐたい。可憐といふことがこの花の生命である。弱いのは花の常ではあるが、分けてもこれは風にも雨にも日の光にも堪へ得ぬかよわさである。籬に伸びた蔓の上に、一輪々々の紅紫を點じて行く働を、初秋の朝なくに見る。いつまでも清新の美を失はぬところに、この花の生命はある。今朝の花は昨日の花ではない。陳腐とか沈滞とかいふことを知らぬ花。そ

長く伸ばした

白露に
風の吹く
秋の野は
つらさ
あそび

その花の咲くのが短く、印象に長く思ふ。朝なくの生命を露の玉のやうに貫き止めずに續けて行く。露の干ぬ間の生命よ。さうして永久の生命よ。生氣潑刺たる若人、その名は朝顔。

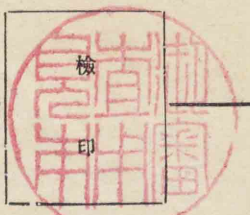
二 香 魚

魚族を花に譬へたなら、朝顔の地位に置かれるべきものは香魚だ。鯛を牡丹に見立て、鯉を蓮に較べた時、香魚はどうしても朝顔でなければならぬ。水清からざれば魚棲まざるといつた清らかさ。彼は腸までも美しい。蚯蚓では釣れないといふ貴い心を外のどんな魚が持つてゐるだらう。悪食をしないばかりでなく、人間の手から投げられた食物には全く目も向けぬ。彼が人間に捕へられるのは、網とい

ふ暴力に罹るのでなければ、友情のための優しい心から罠に欺かれるからだ。悪い人間が罠に香魚を付けて、釣竿を操りながら瀬を泳がせると、香魚は友を慕うて二尾三尾と罠について瀬を上る。恐しい鉤が罠の裾から三四寸のところを流れてゐて、香魚の鰓を引つかける。罠もともにぴん／＼と跳ねて、水から上にあげられるのが香魚の最後。朝顔の凋むのよりも果敢ない生命。

現代國語讀本 卷三終

現代國語讀本



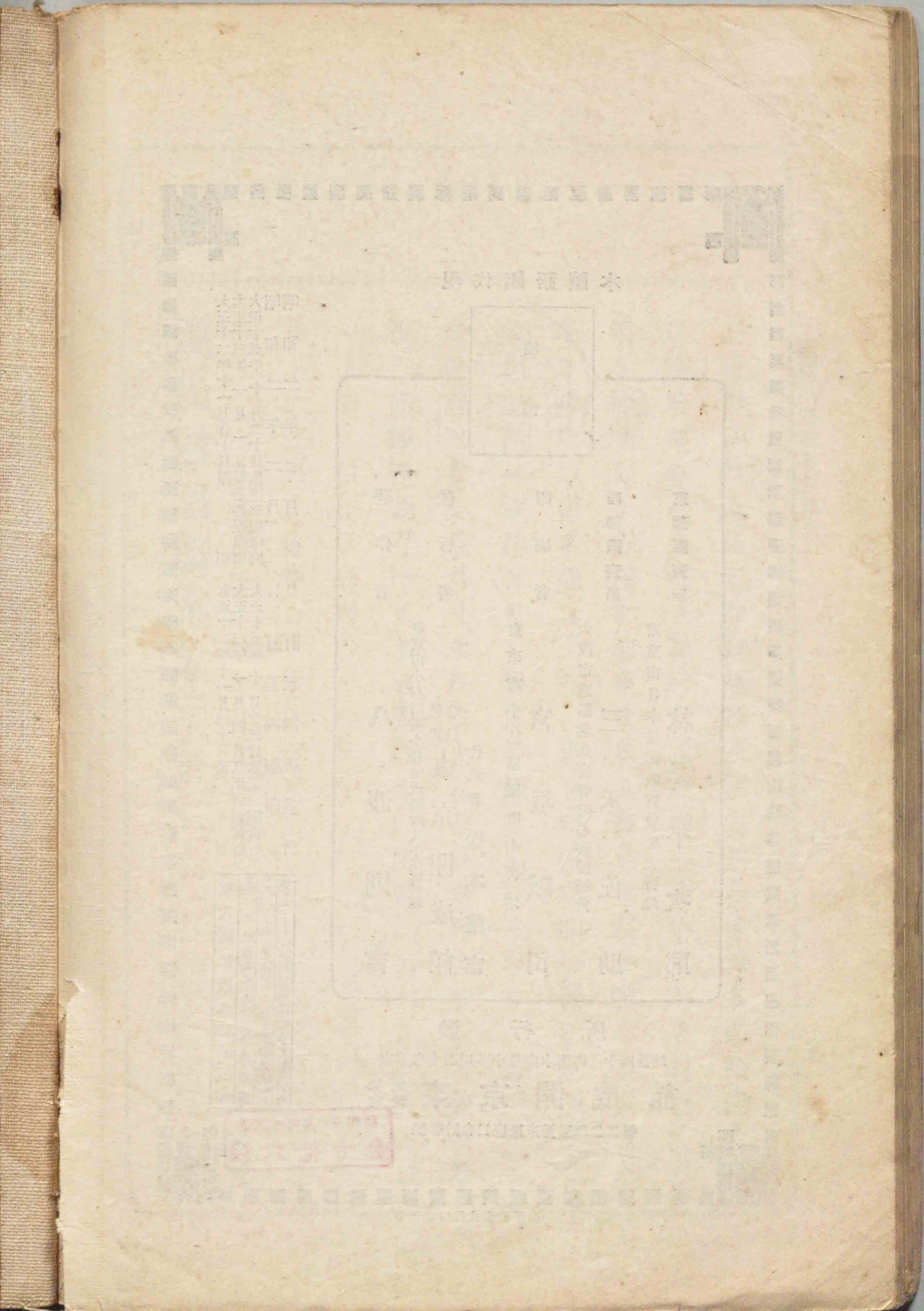
大正十二年十一月廿七日印
 昭和十五年十一月廿七日印
 大正十三年十一月廿七日印
 大正十一年十一月廿七日印
 大正十三年十一月三十日發行
 大正十一年十一月三十日發行
 大正十三年十一月三十日發行
 大正十一年十一月三十日發行

現代國語讀本 昭和二年版
 卷一 二金四拾七錢
 卷二 二金四拾七錢
 卷三 二金四拾七錢
 卷四 二金四拾七錢
 卷五 二金四拾七錢
 卷六 二金四拾七錢
 卷七 二金四拾七錢

著者 八波則吉
 發行者 株式會社東京開成館
 代表者 松本繁吉
 印刷者 宮坂誠司
 西部販賣所 大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角 三木佐助
 東部販賣所 東京市日本橋區數寄屋町九番地 林平次郎

發行所 東京市小石川區小日向水道町八十四番地
 株式會社東京開成館
 振替口座東京第五二二二番

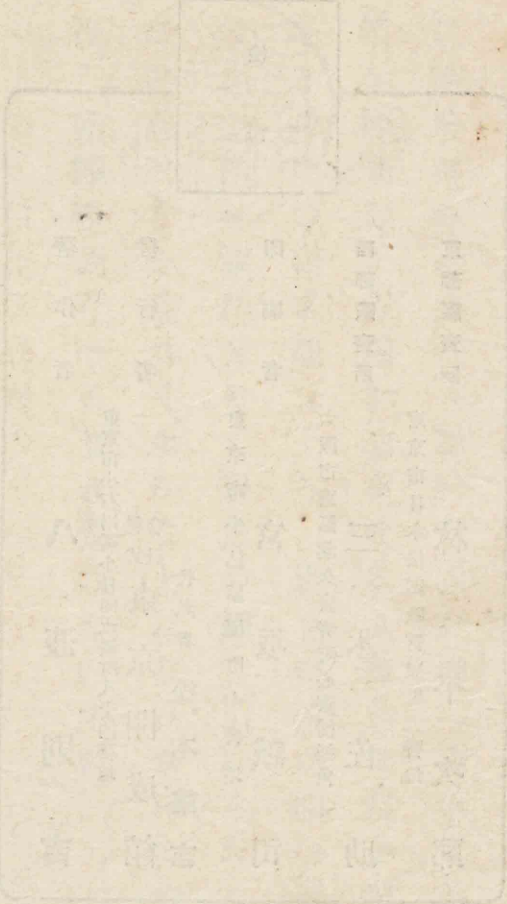
昭和二年版時定價
 金七拾六錢



Faint grid lines and ghosting of text at the top of the back cover.

水雷通商外局

水雷通商外局



Vertical text on the left side of the diagram, likely describing the different parts of the facility.

水雷通商外局

水雷通商外局

水雷通商外局

Faint grid lines and ghosting of text at the bottom of the back cover.



広島大学図書

2000090692

